川 原 遺 跡 Ⅰ

大野城市文化財調査報告書

― 第78集 ―

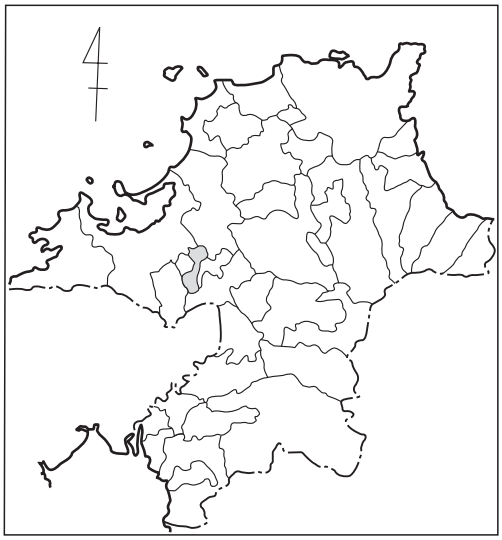
2008

大 野 城 市 教 育 委 員 会

川原（かわはら）遺跡 I

大野城市文化財調査報告書

— 第78集 —



2008

大野城市教育委員会

序

大野城市は福岡平野の一角にあり、福岡市、春日市、太宰府市、宇美町に接しています。水城跡や牛頸窯跡群そして市名の由来となった大野城跡など多くの文化財に恵まれた街です。本市教育委員会では各種開発に先立って発掘調査を実施していますが、その結果さまざまなことがわかってきました。

今回ご報告する川原遺跡は市内北部にある遺跡で、中国新代の貨幣である貨布が見つかった仲島遺跡の近くに位置しています。発掘調査では中世の遺構が確認され、遠く播磨地域の土器が見つかるなどの成果があがっています。

本報告書により、発掘調査の成果が広く世に知られ、当地域の古代史の一端が明らかになることを願っております。

最後に、発掘調査費負担のご協力をいただきました土地所有者や、調査に対してご協力をいただいた関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成２０年３月３１日

大野城市教育委員会
教育長　古賀　宮太

例　　言

１．本書は、大野城市教育委員会が実施した、川原遺跡第１次調査の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は、共同住宅建設に伴って実施したものである。

３．当遺跡の整理作業は、入札によって国際航業株式会社に委託し、執筆の一部（「Ⅰ．はじめに」）を大野城市教育委員会　舟山良一、検査を舟山・林潤也が行った。

４．国際航業株式会社内における業務分担は、次のとおりである。

・遺物実測は岡めぐみが主となり、瓦は伊藤敬太郎が、拓本は高木恵が作成した。

・遺物写真は、高木の補助を得て、岡が撮影した。

・製図は、白石明子が Illustrator9.0 を使用して行なった。

・執筆と編集は、「Ⅲ．２．遺構と遺物」の出土遺物・「Ⅳ．まとめ」の一部の執筆を岡が、その他の執筆はすべて伊藤が行い、編集は伊藤と岡が行った。

なお、遺物の一部の観察については、川口洋平氏（長崎県教育庁学芸文化課）、中島恒次郎氏（太宰府市教育委員会）にご教示をいただいた。

５．本書に使用した陶磁器の分類は、『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会　2000年　による。なお、実測図上の釉の範囲は二点破線を用いている。

６．本書に掲載した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の 2.5 万分の１地形図『福岡南部』・『太宰府』を使用した。

７．遺構図のレベルは、機械高（レベル高）を標高に換算する記録の所在が不明のため表示できていない。なお、都市計画図によれば調査地付近の地表面高は約13.5mを測る。

８．本書の遺物・図面・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに…… 1
Ⅱ．位置と環境…… 3
Ⅲ．調査の結果…… 6
　１．調査概要 …… 6
　２．遺構と遺物 …… 6
Ⅳ．まとめ…… 20

表 目 次

表１～３．川原遺跡第１次調査出土遺物観察表…… 17ー19

図 版 目 次

図版１　(1) 調査区東半（南西から）
　　(2) 調査区西半（北東から）
図版２　(1) ＳＫ 01（北東から）
　　(2) ＳＫ 01 土層断面（北から）
図版３　出土遺物①（ＳＫ 01）
図版４　出土遺物②（ＳＫ 01）
図版５　出土遺物③（ＳＫ 01）
図版６　出土遺物④（ＳＫ 01）
図版７　出土遺物⑤（ＳＫ 01）
図版８　出土遺物⑥（ＳＫ 01、ＳＰ 10・43、ＳＸ 01）

挿 図 目 次

第１図．周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 2
第２図．川原遺跡位置図（1/5,000）…… 4
第３図．遺構配置図（1/100）…… 5
第４図．ＳＢ 01 実測図（1/40）…… 6
第５図．ＳＫ 01 実測図（1/40）…… 7
第６図．ＳＫ 01 出土遺物実測図①（1/3）…… 9
第７図．ＳＫ 01 出土遺物実測図②（1/3・1/4）…… 11
第８図．ＳＫ 01 出土遺物実測図③（1/2・1/3）…… 12
第９図．ＳＫ 01 出土遺物実測図④（1/2・1/3・1/4）…… 14
第 10 図．ＳＰ 08・10・43 出土遺物実測図（1/3）…… 15
第 11 図．ＳＸ 01 出土遺物実測図（1/3）…… 16

Ⅰ．はじめに

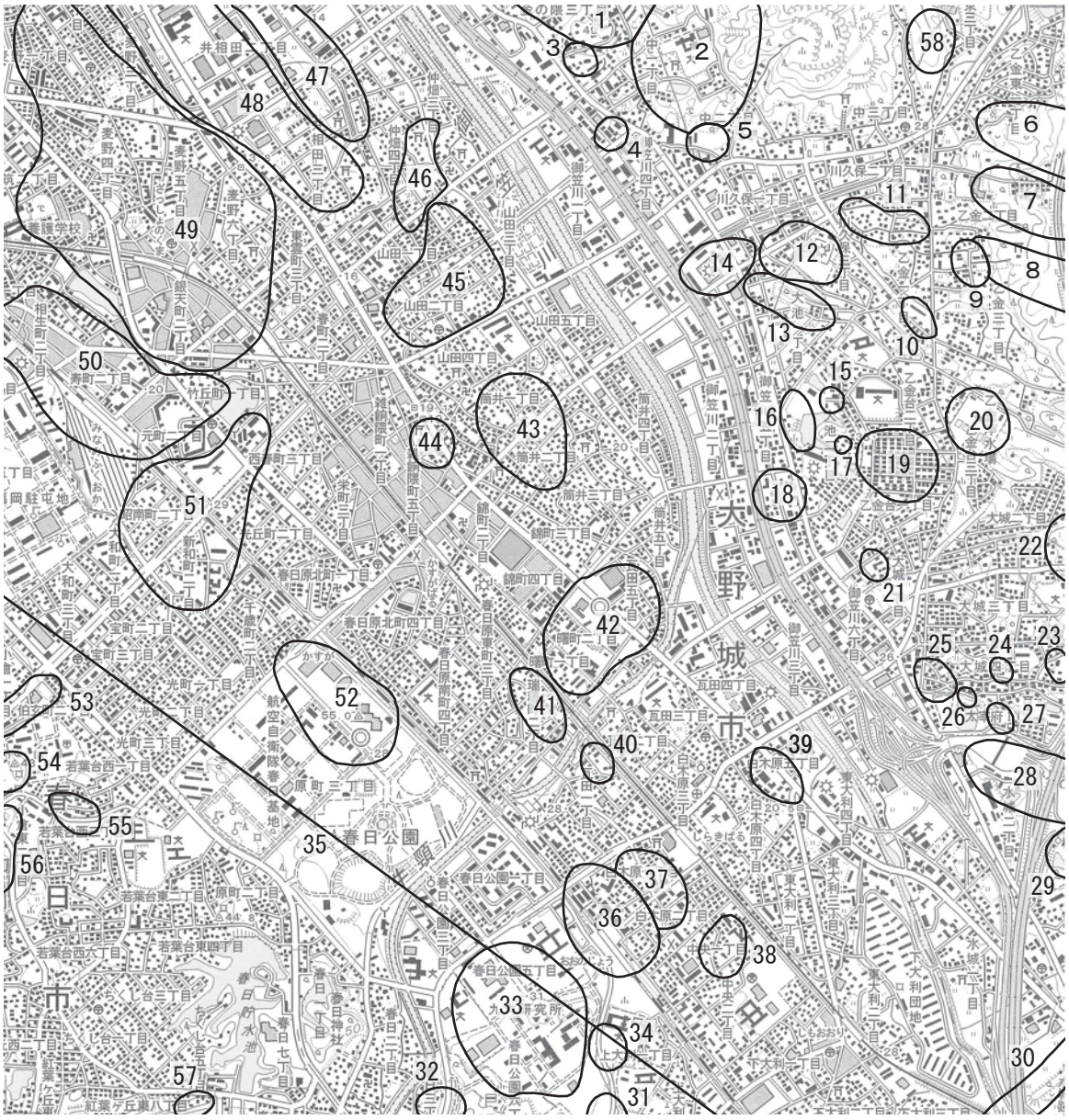
川原遺跡は 1980 年福岡県教育委員会が作成した『福岡県遺跡等分布地図』には登録されていない遺跡で、共同住宅建設のため試掘調査を実施したところ見つかった遺跡である。調査は 1988 年（昭和 63 年）4 月 4 日～ 26 日まで行ったが、280 ㎡という限られた面積であった。

発掘調査は技師向直也を中心にして実施したが、整理作業は 2007 年（平成 19 年度）に実施した。整理作業時の本市教育委員会の体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	古賀　宮太
	教育部長	小嶋　健
	ふるさと文化財課長	舟山　良一
	文化財担当係長	中山　宏
	主査	徳本　洋一
	〃	石木　秀啓
	〃	丸尾　博恵
	主任技師	林　　潤也
	〃	早瀬　賢
	技師	上田　龍児
	嘱託	井上　愛子
	〃	城門　義廣　（8 月まで）
	〃	遠藤　茜
	〃	田尻　義了　（6 月まで）
	〃	石川　健　　（7 月から）
	〃	大里　弥生　（11月から）
	〃	吉井　美智恵
	〃	大久保　玲子
	〃	能塚　由紀

本市教育委員会では、発掘調査を担当した技師の退職等により報告書の刊行が遅れている発掘調査成果の公表については、平成 18 年度より順番を決めて業者委託により年次的に刊行する方針で臨んでいるが、本報告書がその２冊目になる。業者選定は専門業者による入札によっているが、今回は国際航業株式会社福岡支店が落札したことから、同社に委託した。報告書掲載遺物の選択や実測図・原稿等の検査は本市教育委員会が行い作成した。

発掘調査に際しては、ご協力を得た地権者ならびに関係各機関に厚く感謝の意を表します。



第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

１．持田ヶ浦古墳群	２．御陵古墳群	３．今里不動古墳	４．塚口遺跡
５．御陵前ノ椽遺跡	６．喜一田古墳群	７．王城山古墳群	８．古野古墳群
９．花園遺跡	10．薬師ノ森遺跡	11．松葉園遺跡	12．森園遺跡
13．中・寺尾遺跡	14．ヒケシマ遺跡	15．平隈遺跡	16．ウド遺跡
17．ウド古墳	18．榎町遺跡	19．銀山遺跡	20．原口古墳群
21．原門遺跡	22．雉子ヶ尾遺跡群	23．曲目遺跡	24．深町古墳
25．金山遺跡	26．金山古墳	27．笹原古墳	28．成屋形遺跡
29．裏ノ田遺跡	30．水城跡	31．池ノ上遺跡	32．向谷北遺跡
33．九州大学構内遺跡	34．池田遺跡	35．官道推定ライン	36．御供田遺跡
37．後原遺跡	38．ハザコ遺跡	39．原ノ畑遺跡	40．国分田遺跡
41．瑞穂遺跡	42．石勺遺跡	43．村下遺跡	44．雑餉隈遺跡
45．御笠の森遺跡	**46．川原遺跡**	47．仲島遺跡	48．井相田遺跡群
49．麦野遺跡群	50．南八幡遺跡群	51．雑餉隈遺跡群	52．駿河遺跡
53．伯玄社遺跡	54．ナライ遺跡	55．西平塚遺跡	56．高辻遺跡
57．惣利窯跡群	58．唐山古墳群		

Ⅱ．位置と環境

福岡県大野城市は、県中央部西寄りにあり、市域は、南北に細長い形をしている。この地は、古代から交通の要衝であり、現在も中央部を国道３号線、福岡都市高速道路、西鉄天神大牟田線、JR鹿児島本線が平行して通る。地形を概観すると、北部から中央部は南東から北西に流れる御笠川流域の平野部で、南部の大部分と東部は丘陵が占める。

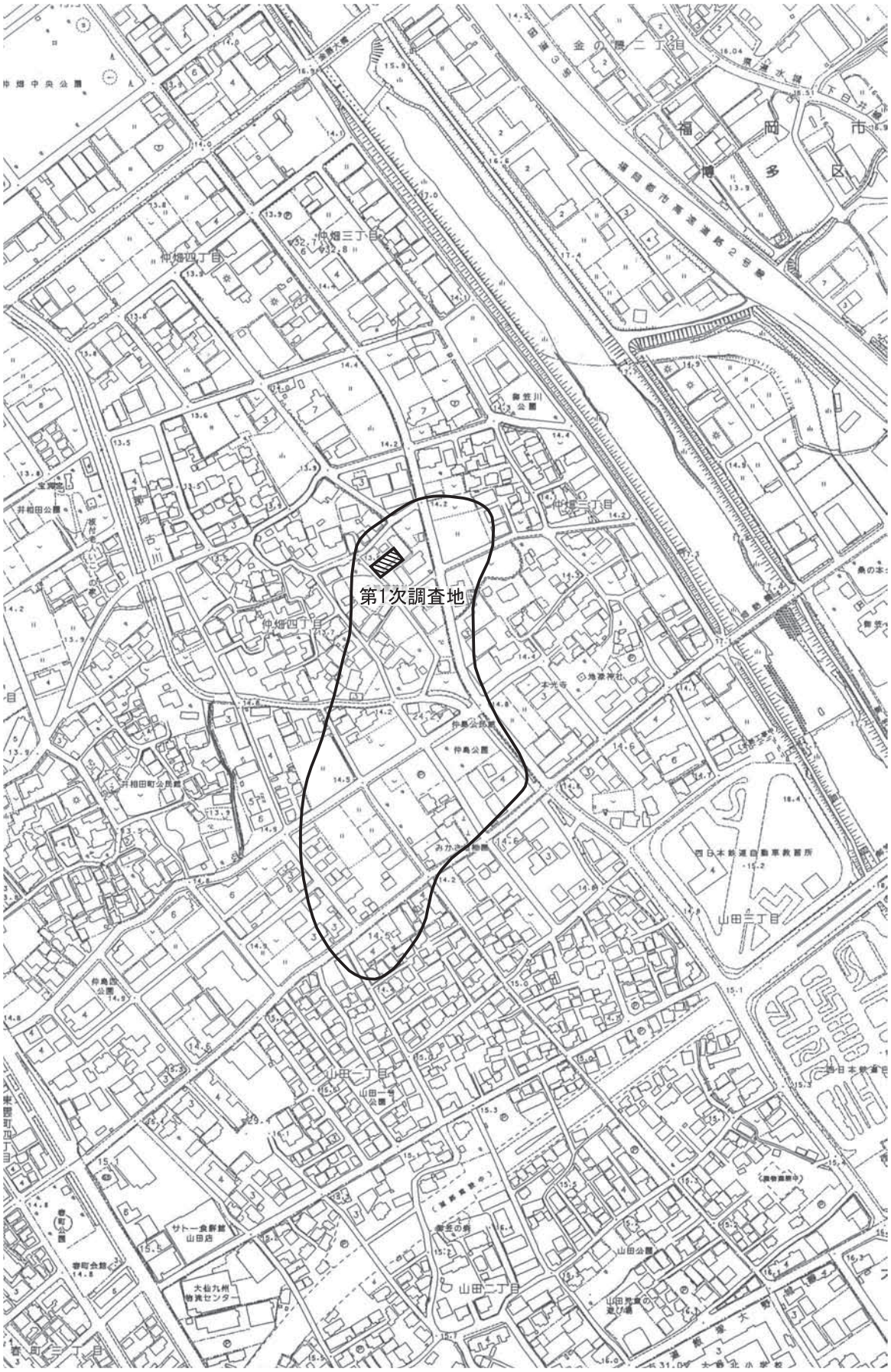
今回報告する川原遺跡は、大野城市仲畑４丁目に所在する。御笠川左岸の沖積平野上に立地し、現地表面の標高は約 13.5 ｍを測る。本調査では、中世の遺構・遺物を中心として、古墳時代・古代の遺物も検出されているため、当該時期を中心に周辺の遺跡を概観する。

古墳時代には、東側の四王寺山や乙金山の山麓、その北西に延びる金隈丘陵沿いに数多くの古墳が築かれる。北から、持田ヶ浦古墳群、御陵古墳群、唐山古墳群、喜一田古墳群、王城山古墳群、古野古墳群などがある。前期古墳が確認されているのは、持田ヶ浦古墳群、御陵古墳群であり、その他は、後期の群集墳である。集落遺跡は、本調査の北西に隣接する仲島遺跡、南には、瑞穂遺跡、石勺遺跡、原ノ畑遺跡がある。特に、仲島遺跡は前期から後期まで集落が営まれ、６世紀後半の大溝からほぼ完形に近い移動式竈が出土している。その他、窯跡群として市域南西部の牛頸山麓に兵庫県以西最大の規模を誇る牛頸窯跡群が展開する。その生産時期は、６世紀中頃から９世紀前半に及ぶ。

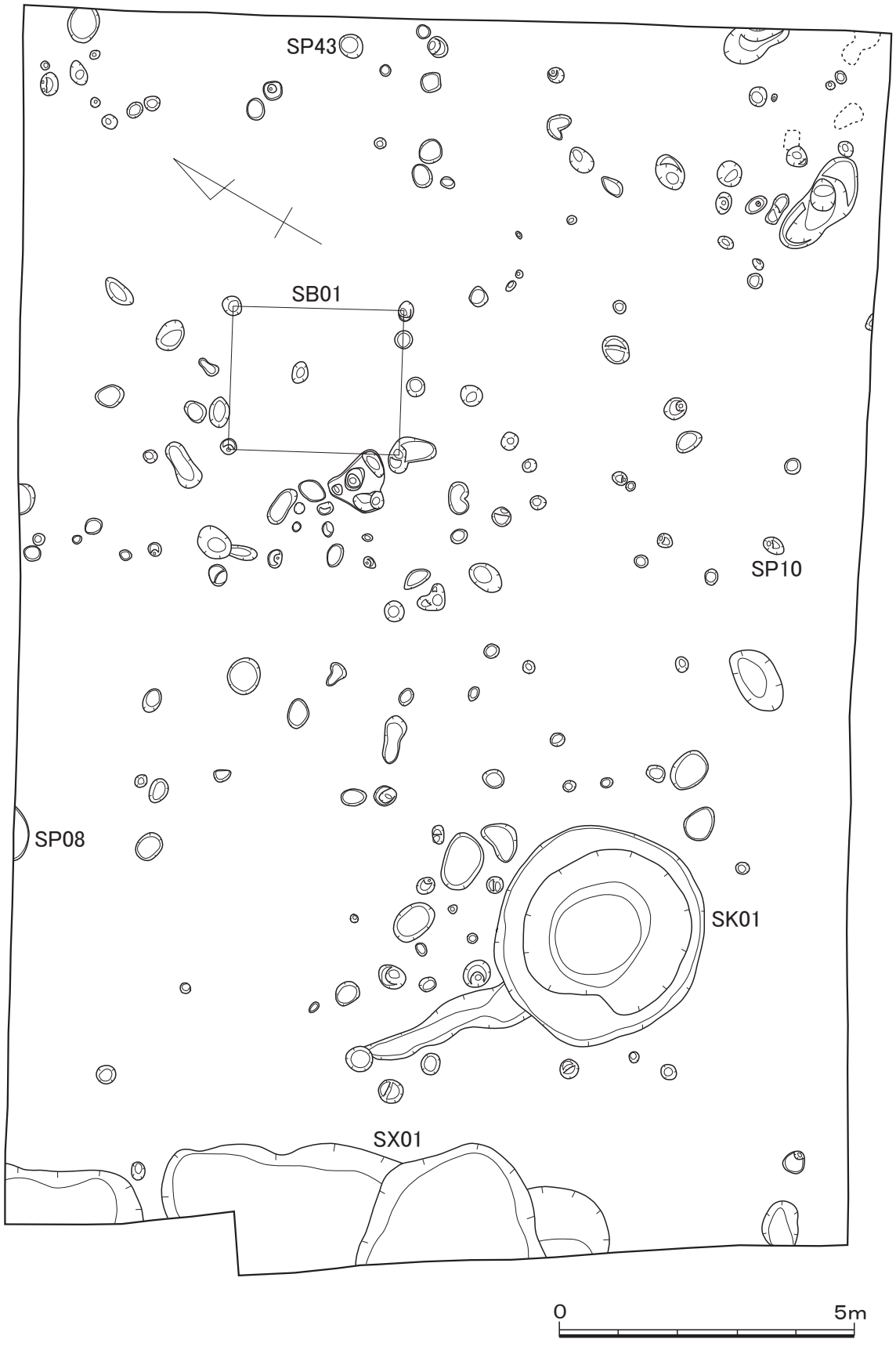
古代になると、著名な遺跡として本遺跡の南南東約４㎞に水城跡、南東約５㎞に本市の市名の由来ともなっている大野城跡が位置する。集落遺跡は、仲島遺跡で多数の井戸を検出するとともに人面墨書土器が出土している。その西に隣接する井相田遺跡群では、40 棟以上の掘立柱建物、竪穴住居が検出されている。墓地としては、石勺遺跡で蔵骨器を有する火葬墓を検出している。

中世になると、大宰府政庁が 11 世紀後半にはその機能を失うとともに、市街地の中心は観世音寺周辺、さらには、今の太宰府天満宮の位置する北東方面へも拡大する。また、中近世の都市遺跡である博多遺跡群は北西約７㎞に位置する。本遺跡の周辺では、御笠川東岸の低丘陵地に集落遺跡や墓地が確認できる。御笠の森遺跡は 11 ～ 17 世紀、薬師ノ森遺跡は 13 世紀代を中心にした集落遺跡であり、松葉園遺跡では 12 世紀代の溝から白磁がまとまって出土している。墓地としては塚口遺跡で３～４基の土坑墓が確認され、その内の１基から 11 世紀後半頃の定窯系の白磁と鉄刀が、また森園遺跡では 12 世紀後半頃の土坑墓から白磁、青磁、鉄刀などが出土している。

参考文献　　『大野城市史』上巻　大野城市史編さん委員会　2005 年



第２図　川原遺跡位置図（1/5,000）



第３図　遺構配置図（1/100）

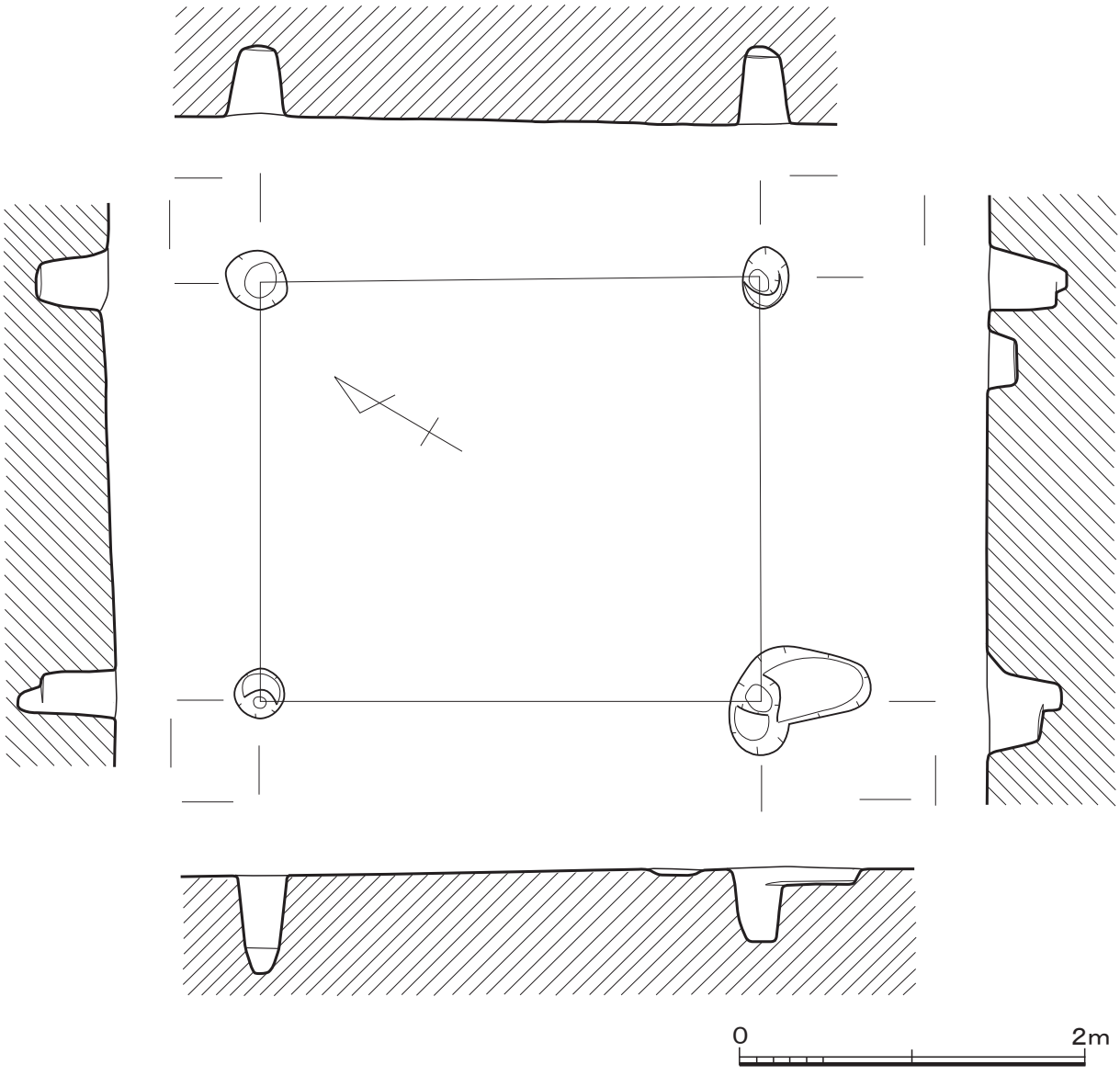
Ⅲ．調査の結果

１．調査概要

調査面積は約 280 ㎡である。残土置き場の関係で、調査区を二分する反転調査を実施した。表土を除去すると遺構面になり、掘立柱建物１棟、大型の土坑１基、多数のピットなどを確認した。遺物は、土師器の杯・皿、瓦器椀、東播系須恵器の鉢、白磁・青磁の椀・皿など中世の遺物が多く、整理箱（内法 40 × 61cm、深さ 15cm）５箱分出土する。

２．遺構と遺物

ｉ．掘立柱建物



第４図　ＳＢ01実測図（1/40）

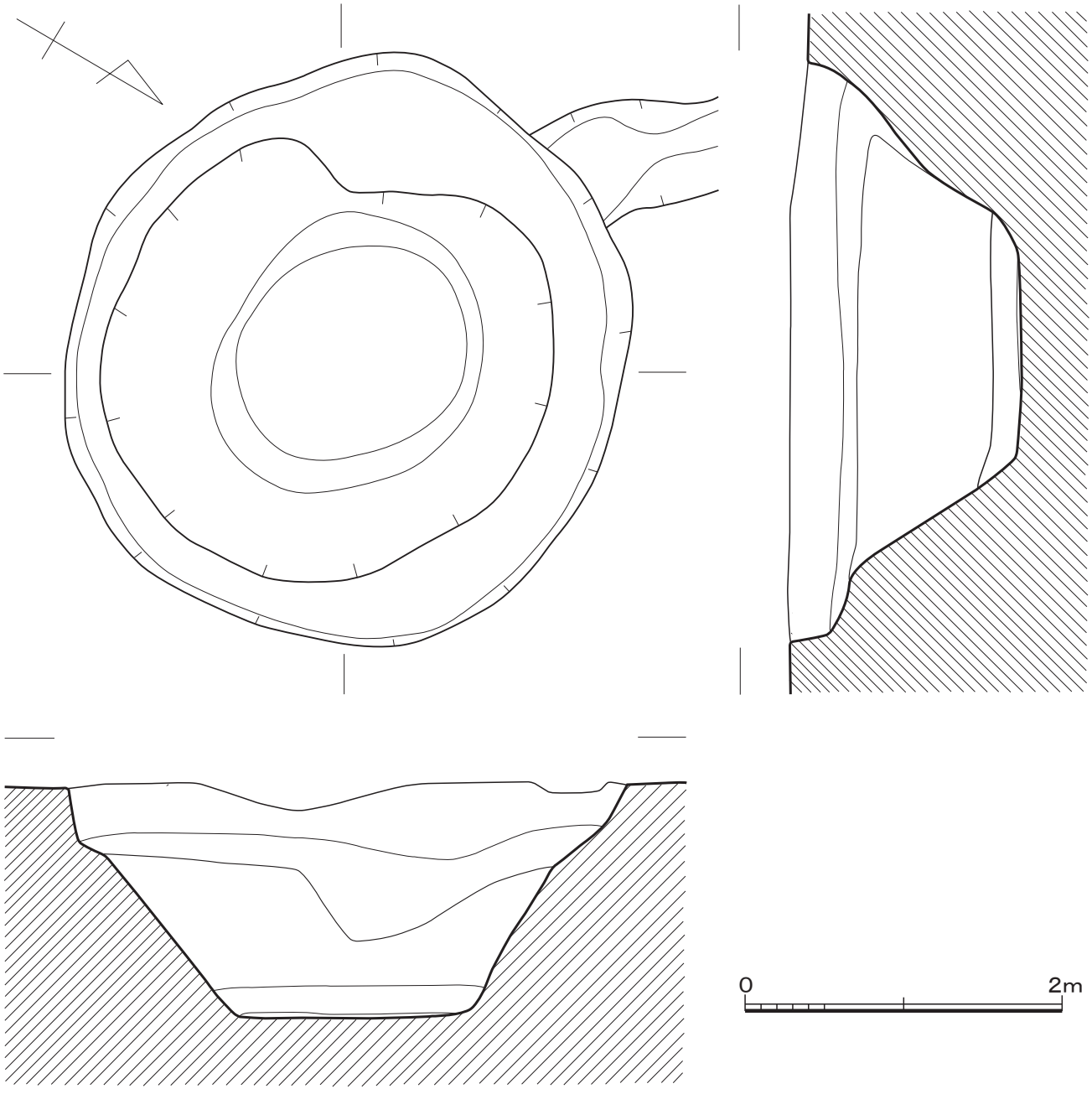
ＳＢ01（第４図）

調査区の北側に位置する。主軸がＮ－30°－Ｗになる１間×１間の側柱建物である。規模は、長辺が約2.9ｍ、短辺が約2.4ｍ、柱穴は径が約35㎝、深さ40～60㎝を測る。遺物は、土師器の高杯の破片と器種不明の破片が数点出土するが、建物の時期を特定できる遺物はない。

ⅱ．土坑

ＳＫ01（第５図、図版２（1）・(2)）

調査区の南側に位置する。平面形状は、ほぼ円形で、径3.7ｍ、深さ1.45ｍを測る大型の土坑である。断面形状は逆台形で、上面より30～50㎝ほど下で二段に掘り込んでテラスを形成し、下



第５図　ＳＫ01実測図（1/40）

部を狭める形状をとる。埋土は三層に分かれ、上から淡褐色土(少量の炭化物を含む)、灰褐色粘質土、最下層は黒色粘質土である。その形状と埋土の様子から、井戸の可能性もある。遺物は、本調査では最も出土数が多く、土師器杯や皿、瓦器椀、白磁椀や皿、龍泉窯系・同安窯系青磁椀、滑石製石鍋など中世の遺物が多い。小破片で図示できなかったものでは、龍泉窯系青磁椀Ⅰ類・皿Ⅰ類、土師質土器の鉢や瓦質土器の鉢・甕などの煮炊具や中国産陶器の盤もある。その他、底面から曲物の底板が出土している。また、古代の須恵器の杯身なども比較的多く出土するが、混入品と思われる。

出土遺物（第６～９図、図版３～８）

土師器

杯（１～６）　１～３は口径 13.1 ～ 13.4 ㎝程の杯である。いずれも底部は糸切りで、見込みに横方向のナデが施され、それに伴って底部外面に板状圧痕が残る。１・２には見込みと体部の境に強いナデが一周する。また、２は底部外面に蓆状の圧痕もみられ、底部を糸切り後、内底ナデによる板状圧痕の前に蓆状の圧痕が付着するのが看取できる。４・５は口径 15.0 ㎝前後の杯である。摩滅により調整は不明であるが、いずれも見込みと体部の境に強いナデが一周する。６は底部の破片で、小皿の可能性もある。底部は糸切りで、見込みに不定方向のナデが施されるのに伴って、底部外面に板状圧痕が残るが、格子目状の圧痕も明瞭に残る。複数の板を合わせて敷いたことによる板の継目跡か。また、外面には部分的に煤が付着する。

小皿（７～ 14）　７～ 12 は扁平な小皿で、口径は 8.0 ～ 9.5 ㎝、器高は１㎝前後を測る。いずれも摩滅により調整が不明瞭であるが、８・９・12 は底部外面に糸切り痕がみられる。また９・12 には見込みに横方向のナデが施されるのに伴って、底部外面に板状圧痕も残る。13・14 は底径が小さく、器高がやや高くなる小皿で、口径はそれぞれ 8.0、8.5 ㎝を測る。13 は摩滅により不明であるが、14 は底部外面に糸切り痕が残る。いずれも見込みに不定方向のナデが施されるのに伴い、底部外面に板状圧痕が残る。また、14 は外面体部下位に板状工具を用いたような断続的な横方向のナデがみられる。

瓦器

椀（15・16）　いずれも筑紫型の底部押し出しの丸底で、15 は底部に糸切り痕が残り、16 は外面に杯の段階での底部と体部の境目に接合痕が残る。口縁部を除いて内面のみミガキを施し、外面底部付近には指押さえの痕跡が一周する。また、15 は口縁部外面から内面全体が、16 は内面全体が黒色を呈する。

瓦質土器

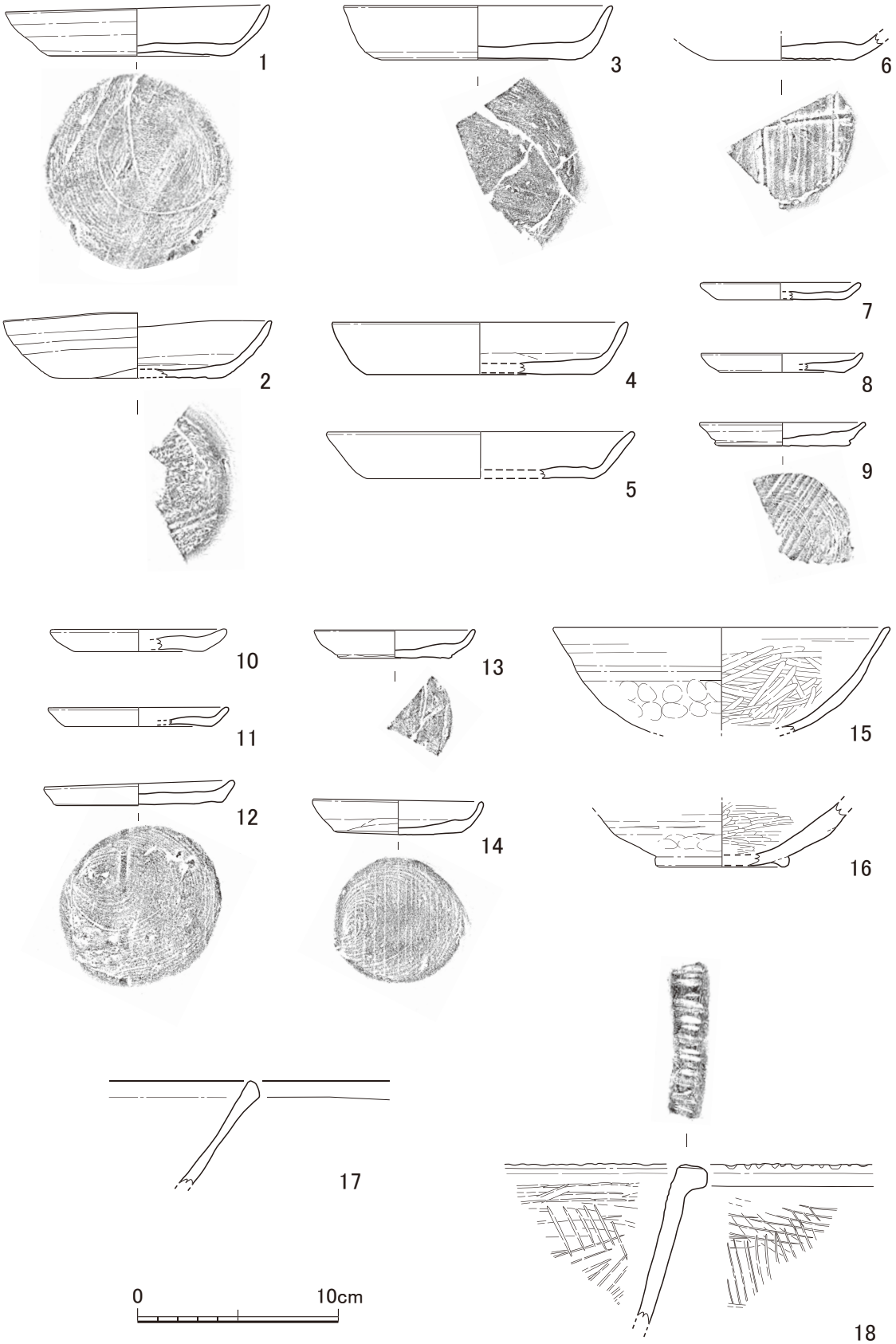
鉢（17）　瓦質の鉢の口縁部小破片で、内外面ともに回転ナデを施す。器壁は薄く、口縁端部は下方にやや拡張して若干肥厚する。

土師質土器

鍋（18）　土師質の鍋の小破片で、内外面ともに粗いハケメを施し、口縁端部には板状工具による刻目を施す。口縁部を含む外面全体に煤が付着する。

東播系須恵器

鉢（19 ～ 21）　19・21 は、体部は直線的で、口縁端部は上下に拡張して肥厚し、口縁部外面に自



第６図　ＳＫ01　出土遺物実測図①（1/3）

然釉がかかる。いずれも外面は回転ナデ、内面はナデを施し、19 は体部外面に沈線が入り、21 には口縁部直下に篦状の工具痕が残る。20 は内外面ナデを施し、底部の径は小さく、糸切りの痕跡が残る。また、19・20 は内面に使用による摩滅がみられる。

国産陶器

甕（22） 常滑の甕である。口縁端部は内側に緩やかな凹線がめぐり、口縁部先端を引き出したような形状をとる。口縁部内面と肩部外面に灰釉がかかり、外面の調整は不明であるが、口縁部調整の横ナデを最後に右上がりにナデ上げているのが観察される。内面は頸部から肩部にかけて回転ナデを施すものの、接合痕が多く残り、頸部には口縁部接合に伴う断続的な横方向のナデが明瞭に残る。

白磁

椀（23 ～ 25） 23 はやや肉厚な玉縁状口縁の椀で、Ⅳ類に属する。玉縁直下から回転ヘラ削りを施す。24 は施釉後に口縁端部の釉を掻き取る口禿げの椀で、口縁部はわずかに外反し、外面口縁部直下に釉が溜まる。Ⅸ類に属する。25 は底部のみの破片で、高台がやや小さく、底部外面の刳りも浅い。見込みに沈圏線を有し、見込み中心が凸状に膨らむ。沈圏線の径は高台よりも小さい。Ⅸ－ 2a 類か。

皿（26 ～ 28） 26 は口縁部がやや外反し、体部内面に沈線を有する皿で、外面体部下位から底部にかけては施釉せず、施釉後に見込み部分の釉を掻き取る。Ⅲ－ 1 類。27・28 は施釉後に口縁端部の釉を掻き取る口禿げの皿で、いずれも平底で、見込みに段を有する。27 は全面施釉するⅨ－ 1c 類、28 は外面体部下位から底部にかけては施釉しないⅨ－ 2 類。

青磁

椀（29 ～ 37） 29 ～ 36 は龍泉窯系の青磁の椀である。29 は片彫蓮弁文を施したⅡ－ a 類、30 ～ 32 は弁の中心が稜をなす鏑蓮弁文を施したⅡ－ b 類、33 は弁の中心が稜をなす鏑蓮弁文を施し、見込みに花文を印刻するⅡ－ c 類、34 は弁の中心が稜をなす細弁の鏑蓮弁文で、体部の腰が張らずに口縁に延びるⅢ－ 2 c 類に属する。34 は本来、青緑色の釉が施してあったが、焼成温度や成分によるものか内外面ともに釉の厚い部分が白色を呈している。35 は胎土がやや粗く、蓮弁文も略化している。Ⅳ類か。36 は見込みに「金玉満堂」の印刻がみられる。37 は器壁が薄く、口縁部がやや外反する椀の小破片で、外面に櫛目文、内面に篦描文を施す。また外面口縁部直下に重ね焼きの痕跡が残る。器形や釉調は同安窯系Ⅲ類に属するが、内面の篦描文は未分類。

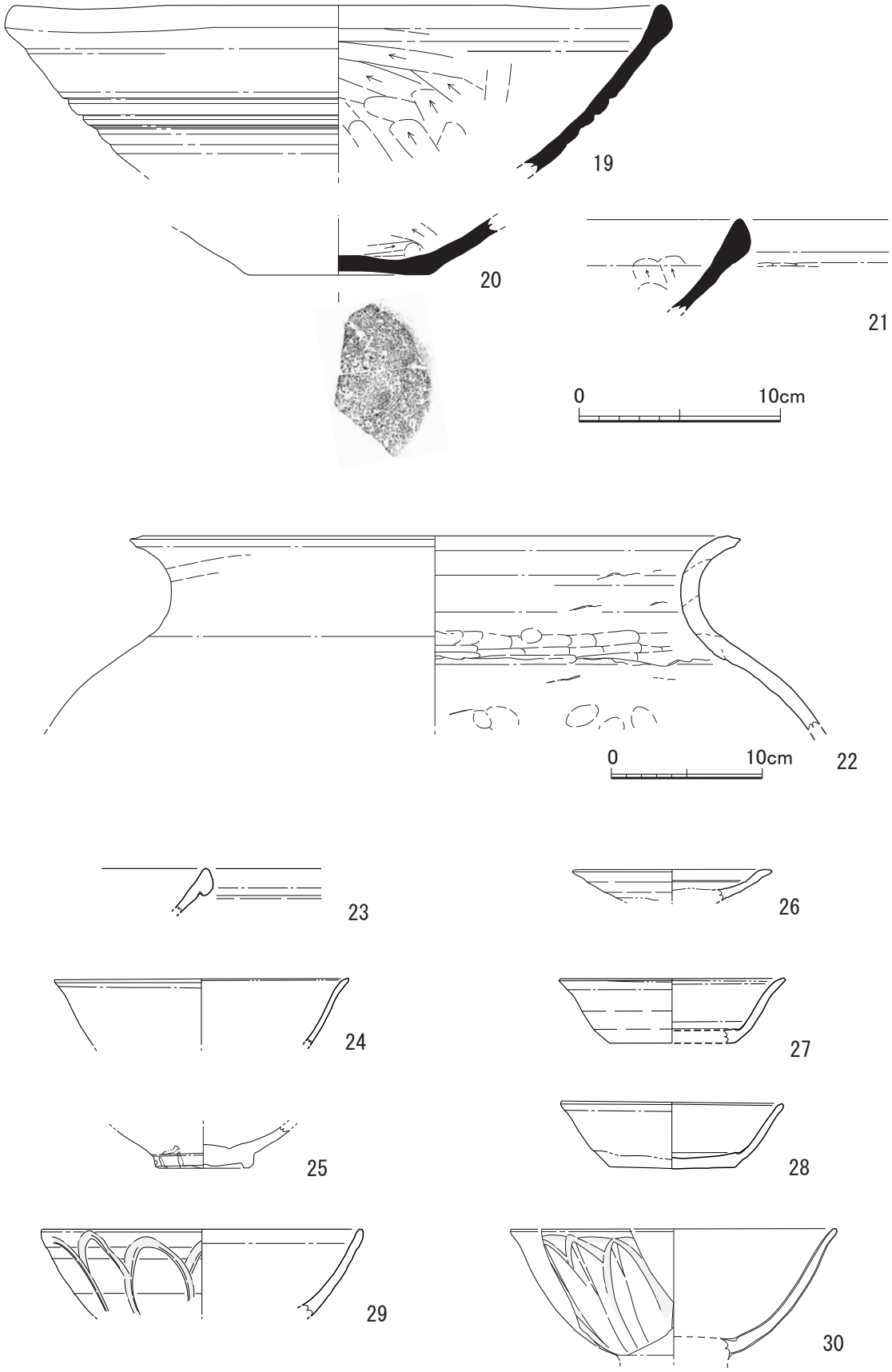
青白磁

合子（38） 合子の蓋の天井部破片で、天井部外面に印花文を施し、内外面に薄く施釉する。

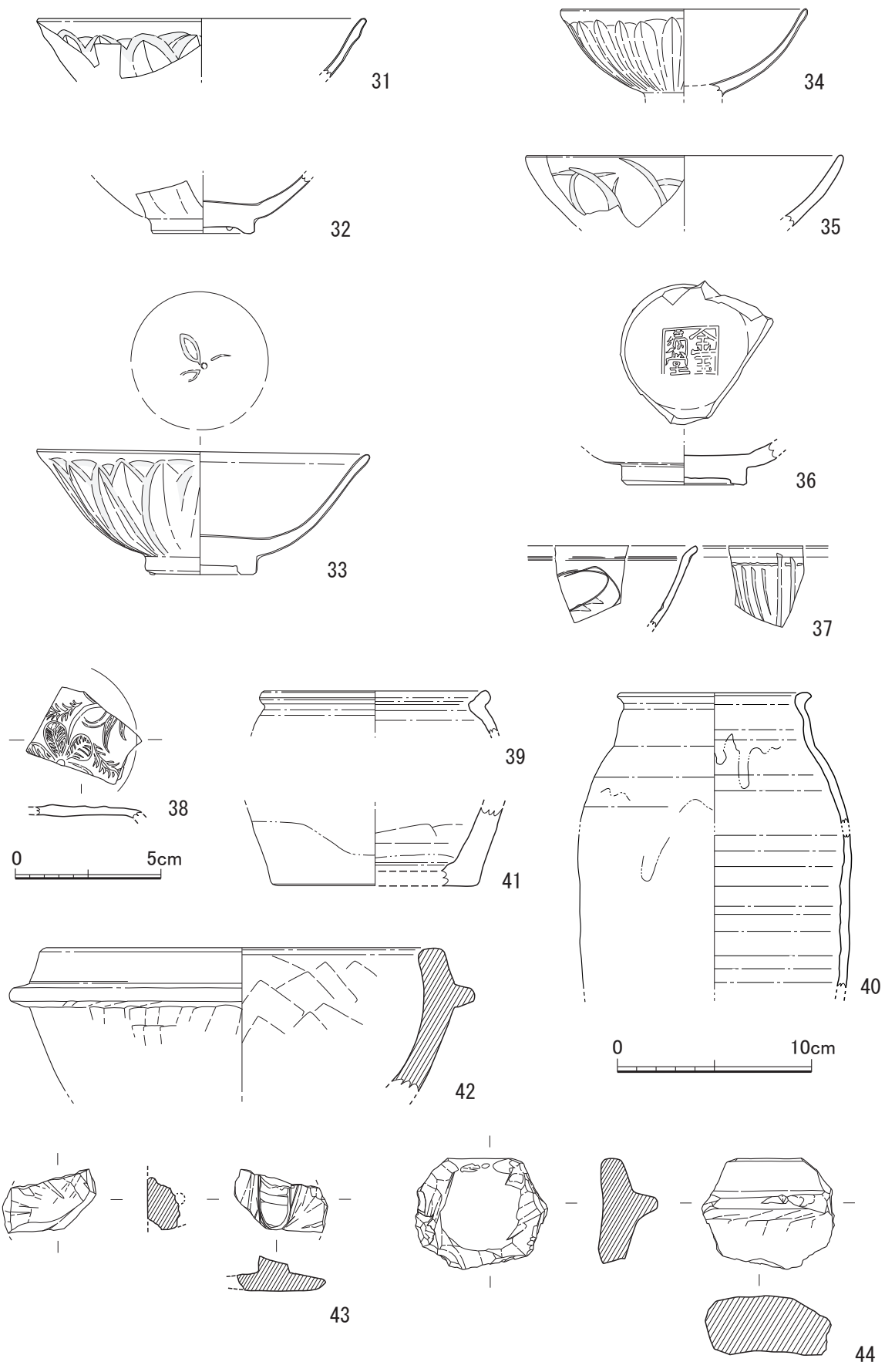
中国産陶器

壺（39・40） 39 は「く」の字形に外反する広口の壺の口縁部破片で、口縁部内面に目跡が残る。径の大きさから四耳壺Ⅵ類の可能性が高いが、水注Ⅷ類も考えられる。40 は褐釉陶器の壺で、頸部は下方に開くが、頸部と胴部の境は明瞭である。外面胴部下位に回転ヘラ削りを施す。焼成温度や成分によるものか、内外面の釉の垂れは白色を呈する。胎土と釉の特徴よりＡ－ 2 群に属する。

瓶？（41） 底部付近の小破片で、外面胴部下位まで緑灰色の釉を施すが、露胎との境は灰白色を呈する。また、内面は胴部下位まで釉垂れが観察される。外面は回転ナデ、内面は横方向の断続的



第７図　ＳＫ01　出土遺物実測図②（22:1/4，その他:1/3）



第８図　ＳＫ01　出土遺物実測図③（38:1/2，その他:1/3）

なナデを施し、見込みは強い回転ナデによって段を有する。中国産陶器の瓶類か。

滑石製品

石鍋（42） 口縁部直下に幅１cm 程の断面正台形の鍔がめぐり、口縁部はやや内湾する。外面は底部から鍔部分に向かって縦方向の削り出し､内面は口縁から底部に向かっての斜め方向の削り出し、鍔部分は体部に向かっての斜め方向の削り出しの痕跡が残る。また､外面全体に厚く煤が付着する。

石鍋転用品（43・44） 43 は石鍋の把手部分を再利用したもので、把手部分に両側から穿孔を施す。端部には内外面とも転用時の鑿による調整痕が残り、石鍋の補修具、いわゆるバレン状石製品と思われる。しかし現状では内外面ともに煤の付着はみられない。44 は石鍋の鍔の部分を再利用したもので、外面には厚く煤が付着する。部分的には割れを利用しながらも、側面と内面には転用時に鑿による調整が細かく施される。鍔の部分に穿孔はみられないが、石鍋の補修具であろうか。

土製品

土錘（45） 全体的に摩滅しており、調整は不明。両側から穿孔している。焼成により、黒斑のように半分が暗黄灰色を呈する。

瓦

丸瓦（46） 丸瓦の筒部破片で、凸面は斜格子叩きの後すり消し、凹面には布目痕を残す。

鉄製品

鉄釘？（47） 錆化が著しく、全体が錆に覆われる。現状では径が 5.5 ～ 7.0 mm を測る断面円形の棒状鉄製品で、一方の端部に向かって細くなる形状をなす。鉄釘か。

環状金具（48） 錆化が著しく、部分的に欠損するが、現状で径 0.7 × 1.0 cm を測る断面楕円形の棒状のものを径４cm 程の円形に巻き、端部を重なり合わせている。端部の重なり合う部分は約 2.8 cm を測る。

石製品

砥石（49・50） 49 は泥岩製の砥石で、砥面は表裏で２面あり、使用による擦痕も残る。また砥面以外の側面には全体的に細かい敲打痕がみられる。50 は全体的に破損するが、現状で砥面は表裏と側面の３面あり、使用による擦痕も残る。泥岩製か。

須恵器

甕（51） 大甕の口縁部の小破片で､口縁端部は上方へ拡張し､端部外面に突帯を有する形状をとる。内外面に自然釉がかかり、内面の調整は不明であるが、外面は回転ナデ後、２条の沈線を施し、口縁端部直下から沈線の間に二段の波状文を施す。また、２条目の沈線下には成形時のものか断続的な右上がりのナデの痕跡が広範囲に残る。

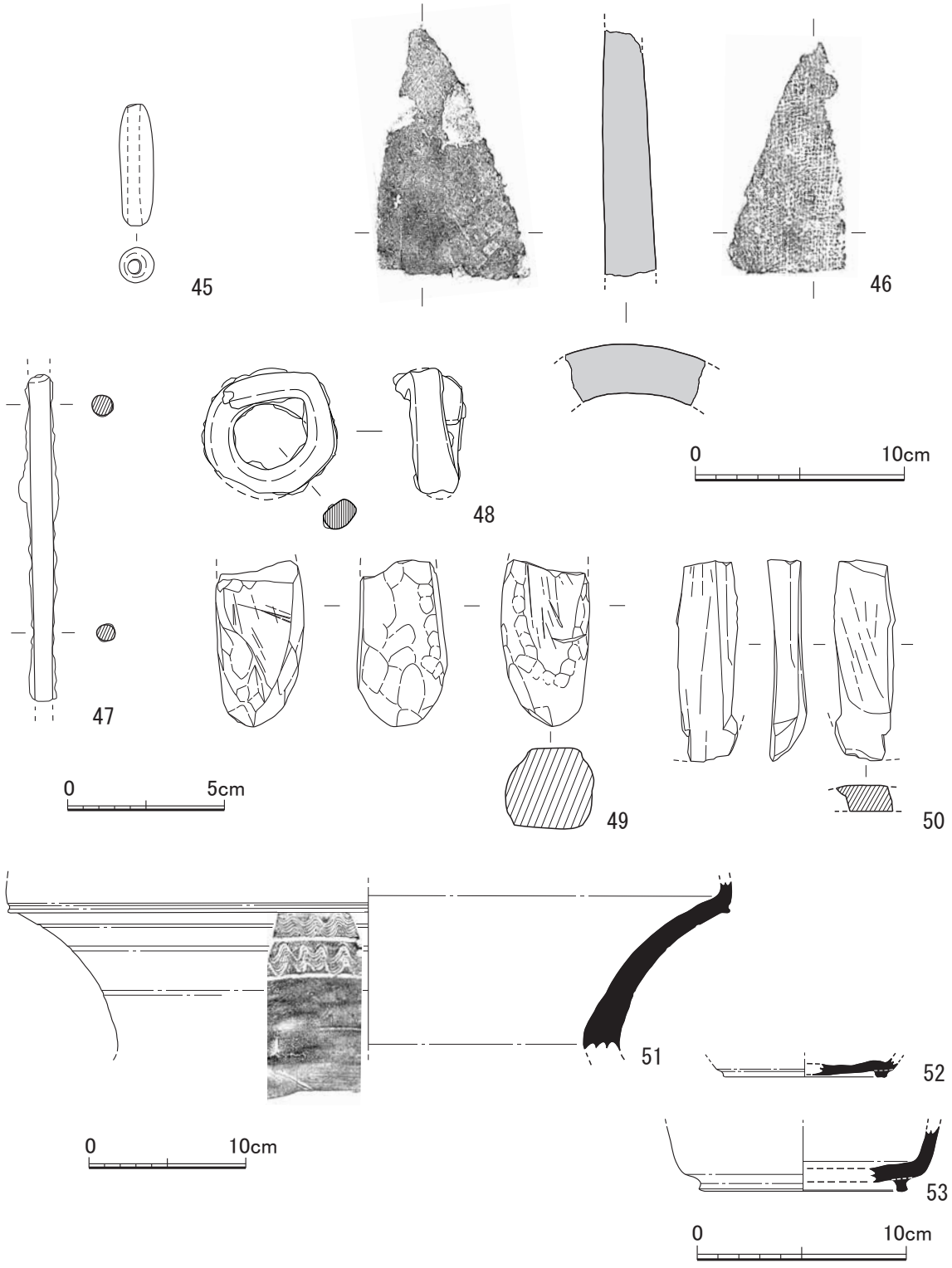
杯身（52･53） いずれも貼り付け高台を有する杯身の底部で､52 は底部外面を回転ヘラ切りした後、底部外側に低い高台を貼り付けている。体部はおそらく直線的に立ち上がり、８世紀後半～９世紀初めの型式か。53 は外面の体部と底部の境が角張って稜をなし、底部のやや内側に低い高台が貼り付く。体部はほぼ直立して立ち上がる。８世紀中頃の型式と思われる。

その他

椀形鍛冶滓（図版８－ 54） 不整円形の椀形鍛冶滓で、若干端部を欠損するが、ほぼ完存する。上

面は浅く窪んで凹凸があり、底面は凹凸や気泡が多く、小さな木炭痕が残る。銹化によるためか、含鉄部分はほとんどみられず、磁力も弱い。

粘土塊（図版８－55） 小片であるが、一方の面が若干曲線を描く。被熱により、全体的ににぶい橙色を呈するが、部分的に灰色を呈する。胎土は微細な白色砂粒と小さめのスサを多量に混和している。



第９図　ＳＫ01　出土遺物実測図④（45･47～50:1/2，46･52･53:1/3，51:1/4）

ⅲ．その他の遺構と遺物

本調査ではピットを多数検出したが、出土遺物は少なく、器種も特定できないような小破片ばかりであった。ピットに関しては、器種が特定できる遺物が出土したものだけ、以下に述べる。

ＳＰ 08（第３図）

調査区の西端に位置する。遺構が調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、現状で、長軸 90 ㎝、短軸 25 ㎝以上、深さ 60 ㎝を測る。円形のピットになると想定される。遺物は、瓦器椀、東播系須恵器の鉢が出土し、その他小破片で図示できなかったものでは、土師器の杯や椀、器種不明の須恵器の破片などがある。

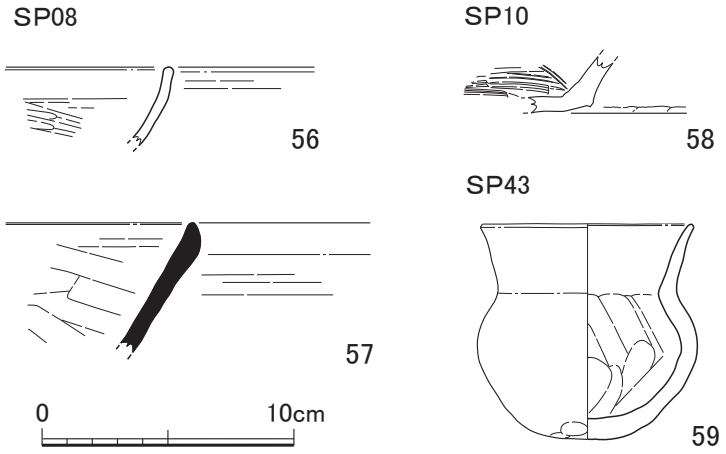
出土遺物（第 10 図）

瓦器

椀（56） 口縁部の小破片で、外面は摩滅により調整は不明であるが、内面は口縁部を除いてミガキの痕跡が残る。体部外面は灰白色を呈するが口縁部外面から内面全体が黒色を呈する。

東播系須恵器

鉢（57） 口縁部の小破片である。口縁部から体部にかけて直線的で、口縁端部はやや上下に拡張するが、それほど肥厚しない。内外面ともにナデを施す。また、全体的に灰色を呈するが、焼成時の重ね焼きの痕跡として、口縁端部のみ暗灰色を呈する。



第10図　ＳＰ08・10・43　出土遺物実測図（1/3）

ＳＰ 10（第３図）

調査区の東側に位置する。平面形状は楕円形で、長軸 40 ㎝ ×短軸 30 ㎝、深さ 17 ㎝を測る。出土遺物は少なく、瓦質土器の底部かと思われる小破片と弥生土器の小破片数点だけである。

出土遺物（第 10 図、図版８）

瓦質土器？

器種不明（58） 底部の小破片と思われる。内外面ともに橙色を呈するが、器壁の中心のみ層状に灰色を呈するため、瓦質土器か還元不良の須恵器の可能性がある。外面は摩滅するが、底部外端にハケの端部痕が残る。内面は横方向の粗いハケメ調整をそのまま残し、作りも粗雑なため、器種は杯などの供膳具ではなく、甕・壺の底部の可能性がある。また、仮に瓦質土器であれば、捏鉢なども考えられる。

ＳＰ 43（第３図）

調査区の北東側に位置する。平面形状は円形で径 45 ㎝、深さ 10 ㎝を測る。出土遺物は少なく、古墳時代の土師器の壺１点と器種不明の小破片数点だけである。

出土遺物（第 10 図、図版８）

土師器

壺（59） 古墳時代中期の小形の壺で、外面は摩滅が著しく調整は不明であるが、底部に指押さえの痕跡が残る。内面は底部から肩部にかけて全面に、放射状に削り状の強いナデが施される。

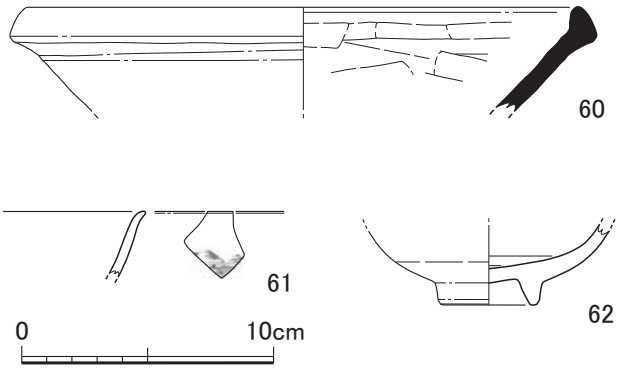
ＳＸ 01（第３図）

調査区の南西端に位置する。遺構が調査区外に広がるため全体の形状は不明だが、現状は不整形で４つの窪み状になる。規模は長辺 10.2 ｍ以上、短辺 2.1 ｍ以上、深さ約 50 ㎝を測る。出土遺物は、弥生土器の甕、須恵器の杯身、土師器の杯や皿、瓦器椀、東播系須恵器の鉢、白磁･青磁の椀、近世陶磁器の椀など様々である。最も時期が新しいものでは、小破片であるが、近代磁器の皿もしくは椀、擂鉢、石炭の小片があり、埋没年代は明治以降と思われる。

出土遺物（第 11 図、図版８）

東播系須恵器

鉢（60） 口縁端部が上下に拡張して肥厚する鉢で、口縁部外面に自然釉がかかり、暗灰色を呈する。外面は回転ナデ、内面はナデを施す。また、口縁部内面には口縁部成形時のものかと思われる断続的な強い横方向のナデの痕跡が残る。



第11図　ＳＸ01　出土遺物実測図（1/3）

近世磁器

染付小杯（61） 口縁部端反りの小杯で、体部外面に手描きの染付けを施し、透明釉を施す。小破片のため、文様構成は不明。17 世紀後半頃の肥前磁器と思われる。

近世陶器

椀（62） 18 世紀頃の唐津焼の椀の底部である。高台は高く、高台と高台脇の境は明瞭で、高台見込みを高台脇よりも深く削り込んでいる。釉は高台畳付け部を除いて全面施釉した後、見込みを蛇ノ目釉剥する。また、この釉剥部分には焼成時の重ね積みの痕跡がみられる。釉は黄褐色、暗褐色、灰白色が斑に発色するため、灰釉であろうか。

表1　川原遺跡第1次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種　類	器　種	出土地点	法量（cm）①口径②器高③底径④高台径 ※（）は復元径〈〉は現存高	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調 D 残存	備　考
1	土師器	杯	SK01	① 13.15 ② 2.5 ③ 9.1	内外面回転ナデ、底部外面糸切り痕・板状圧痕、内面体部と見込みの境に断続的な強い横方向のナデ、見込み横方向のナデ。	A0.5 ～ 3mm 程の白色砂粒と雲母細片を多く含み、赤色粒子をわずかに含む B 良好 C 外面：にぶい橙色～にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色～にぶい橙色 D3/4	
2	土師器	杯	SK01	①（13.4）② 3.25 ③（8.4）	内外面回転ナデ、底部外面糸切り痕・蔕状圧痕・板状圧痕、内面体部と見込みの境に強い横方向のナデ、見込み横方向のナデ。	A 微細な白色砂粒をごくわずかに含み、雲母細片を多く含む B やや不良 C 外面：灰黄色～褐灰色 内面：灰黄色 D1/4	
3	土師器	杯	SK01	①（13.4）② 2.7 ③（9.7）	摩滅により調整不明。外面体部下位回転ヘラ削り？、底部外面糸切り痕・板状圧痕、見込み横方向のナデ。	A0.5 ～ 1mm 程の白色砂粒と雲母細片を少量含み、赤色粒子をやや多く含む B やや不良 C 淡灰黄色 D1/4	
4	土師器	杯	SK01	①（14.8）② 2.6 ③（11.3）	外面摩滅により調整不明、内面回転ナデ、内面体部と見込みの境に断続的な強い横方向のナデ、見込み横方向のナデ？	A0.5 ～ 2mm 程の白色砂粒と赤色粒子をわずかに含み、雲母細片を多く含む B 不良 C にぶい黄橙色～灰黄褐色 D1/5	※小破片のため径は不確定
5	土師器	杯	SK01	①（15.4）② 2.3 ③（11.3）	摩滅により調整不明。内面体部と見込みの境に強い横方向のナデ。	A0.5mm 程の白色砂粒と赤色粒子をわずかに含み、雲母細片をやや多く含む B 不良 C にぶい黄橙色 D1/5	
6	土師器	杯	SK01	②〈1.3〉③（7.3）	内外面回転ナデ、底部外面糸切り痕・板状圧痕・板の継目痕？、見込み不定方向のナデ。	A0.5 ～ 4mm 程の白色砂粒を少量含む B 良好 C 外面：褐灰色～にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色 D 底部 2/5	外面部分的に煤付着
7	土師器	小皿	SK01	①（8.0）② 0.85 ③（6.3）	摩滅により調整不明。	A0.5mm 程の白色砂粒をわずかに含み、雲母細片を多く含む B 不良 C にぶい黄橙色 D1/5	
8	土師器	小皿	SK01	①（8.1）② 0.95 ③（6.2）	摩滅により調整不明。底部外面糸切り痕・板状圧痕。	A0.5 ～ 2mm 程の白色砂粒と雲母細片を多く含み、赤色粒子を若干含む B やや不良 C 黄橙色 D1/4	
9	土師器	小皿	SK01	①（8.3）② 1.15 ③（6.7）	底部外面糸切り痕・板状圧痕、見込み回転ナデ後横方向のナデ。	A0.5 ～ 3mm 程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含み、赤色粒子と角閃石をわずかに含む B 良好 C にぶい橙色 D1/3	
10	土師器	小皿	SK01	①（8.8）② 1.1 ③（6.4）	摩滅により調整不明。	A0.5 ～ 2mm 程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含み、赤色粒子をわずかに含む B 不良 C 外面：にぶい黄橙色～にぶい橙色 内面：浅黄橙色 D1/5	
11	土師器	小皿	SK01	①（9.0）② 0.95 ③（7.3）	摩滅により調整不明。	A0.5mm 程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含み、赤色粒子を多く含む B 不良 C 浅黄橙色 D1/4	
12	土師器	小皿	SK01	① 8.4 ～ 9.5 ② 1.25 ③ 8.45	底部外面糸切り痕・板状圧痕、内面回転ナデ、見込み横方向のナデ。	A0.5 ～ 3mm 程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含む B 良好 C にぶい黄橙色～にぶい橙色 D ほぼ完存	
13	土師器	小皿	SK01	①（8.0）② 1.4 ③（5.4）	外面摩滅により調整不明、底部外面板状圧痕、内面回転ナデ、見込み不定方向のナデ。	A0.5 ～ 2mm 程の白色砂粒、雲母細片を多く含み、赤色粒子を少量含む B やや不良 C 外面：にぶい黄橙色～黄灰色 内面：にぶい黄橙色 D1/4	
14	土師器	小皿	SK01	① 8.5 ② 1.8 ③ 6.4	内外面回転ナデ、外面体部下位断続的な横方向のナデ、底部外面糸切り痕・板状圧痕、見込み不定方向のナデ。	A0.5 ～ 2mm 程の白色砂粒を少量含み、雲母細片を多く含む B 良好　C 浅黄色～黄灰色 D ほぼ完存	
15	瓦器	椀	SK01	①（16.8）②〈5.2〉	外面回転ナデ、外面底部付近指押さえ、底部外面糸切り痕、内面ミガキ。	A0.5 ～ 3mm 程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片をわずかに含む B 良好 C 外面：灰白色（口縁部のみ黒灰色） 内面：黒灰色 D1/6	
16	瓦器	椀	SK01	②〈3.2〉④（6.7）	外面回転ナデ？、外面底部付近指押さえ、内面ミガキ。貼り付け高台。	A0.5mm 以下の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片をわずかに含む B やや不良 C 外面：灰白色～にぶい橙色 内面：黒褐色 D 底部 1/4	
17	瓦質土器	鉢	SK01	②〈5.15〉	内外面回転ナデ。	A0.5 ～ 4mm 程の白色砂粒を多く含み、雲母細片を少量含む B 良好 C 外面：灰白色～浅黄橙色 内面：浅黄橙色～灰白色 D 口縁部破片	
18	土師質土器	鍋	SK01	②〈7.95〉	内外面粗いハケメ。口縁端部上面、板状工具による刻目。	A0.5 ～ 4mm 程の白色砂粒を多く含み、雲母細片をやや多く含む B 良好 C 外面：にぶい黄橙色～黒褐色 内面：にぶい黄橙色 D 口縁部破片	外面煤付着

表2　川原遺跡第1次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種　類	器　種	出土地点	法量（cm）①口径②器高③底径④高台径 ※（ ）は復元径〈 〉は現存高	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調 D 残存	備　考
19	東播系須恵器	鉢	SK01	①（33.2）②〈8.3〉	外面回転ナデ・沈線、内面ナデ。	A0.5 ～ 4mm 程の白色砂粒をやや多く含む B 良好 還元：良好 C 外面：灰色～暗灰色 内面：灰色～黄灰色 D 口縁部 1/6	使用痕あり
20	東播系須恵器	鉢	SK01	②〈2.8〉③（9.0）	内外面ナデ、底部外面糸切り痕。	A0.5 ～ 2mm 程の白色砂粒をやや多く含む B 良好 還元：良好 C 外面：灰色 内面：灰色（部分的に褐灰色）D 底部 1/4	使用痕あり
21	東播系須恵器	鉢	SK01	②〈4.5〉	外面回転ナデ、内面ナデ。	A0.5 ～ 2mm 程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片をごくわずかに含む B 良好 還元：良好 C 外面：灰色～暗灰色 内面：灰色 D 口縁部破片	工具痕あり
22	国産陶器	甕	SK01	①（40.4）②〈12.75〉	外面灰釉により調整不明。頸部内面回転ナデ・断続的な横方向のナデ、肩部内面回転ナデ・指押さえ。	A0.5 ～ 5mm 程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片をわずかに含む B 良好 C 外面：にぶい褐色～灰オリーブ色・灰白色（釉）内面：にぶい黄褐色～にぶい褐色～灰オリーブ・灰白色（釉）D 口縁部 1/5	常滑
23	白磁	椀	SK01	②〈2.2〉	外面回転ヘラ削り、内面回転ナデ。内外面施釉。	A 精良。黒色粒子を含む、淡灰黄色 B 良好 C 釉：灰オリーブ D 口縁部破片	貫入あり
24	白磁	椀	SK01	①（14.6）②〈3.3〉	内外面施釉後、口縁端部釉掻き取り。施釉により調整不明。	A 精良。灰白色 B 良好 C 釉：灰白色 D 口縁部破片	口禿げ
25	白磁	椀	SK01	②〈2.05〉④ 4.9	外面回転ヘラ削り、内面回転ナデ、見込み沈圏線。削り出し高台。外面体部下位から底部外面までを除き施釉。	A 少し粗い。黒色粒子を含む、灰白色 B 良好 C 釉：灰緑色半透明 露胎：浅黄橙色 D 底部のみ完存	
26	白磁	皿	SK01	①（9.9）②〈2.0〉	外面回転ヘラ削り、内面回転ナデ。内面から外面体部下位まで施釉後、見込み釉掻き取り。	A 気泡が多く、粗い。黒色粒子を含む、灰黄色 B 良好 C 釉：黄灰色 露胎：灰黄色 D 口縁部 1/4	貫入あり
27	白磁	皿	SK01	①（11.3）② 3.2 ③（6.2）	外面体部下半回転ヘラ削り、他は回転ナデ。内外面施釉後、口縁端部釉掻き取り。	A 黒色粒子を含む、淡灰色 B 良好 C 釉：灰緑色 D1/4	口禿げ
28	白磁	皿	SK01	① 11.1 ② 3.35 ③ 6.35	外面体部下半回転ヘラ削り、底部外面糸切り後回転ヘラ削り？、他は施釉により調整不明。内面から外面体部下位まで施釉後、口縁端部釉掻き取り。	A 精良。灰白色 B 良好 C 釉：淡緑白色 露胎：灰黄褐色 D2/3	口禿げ
29	青磁	椀	SK01	①（16.0）②〈4.3〉	外面回転ヘラ削り・片彫蓮弁文、内面回転ナデ。内外面施釉。	A 緻密。灰色 B 良好 C 釉：オリーブ灰色 D 口縁部 1/6	
30	青磁	椀	SK01	①（16.2）②〈6.5〉	外面鎬蓮弁文、内面回転ナデ。内外面施釉。	A 緻密。黒色粒子を含む、灰白色 B 良好 C 釉：青緑色透明 D1/8	
31	青磁	椀	SK01	①（17.0）②〈3.05〉	外面鎬蓮弁文、内面回転ナデ。内外面施釉。	A 緻密。暗灰色 B 良好 C 釉：緑灰色透明 D 口縁部 1/4	
32	青磁	椀	SK01	②〈3.0〉④ 5.3	外面鎬蓮弁文、内面施釉により調整不明。削り出し高台。高台畳付部から底部外面までを除き施釉。	A 砂粒を含み少々粗い。暗灰色 B 良好 C 釉：灰オリーブ色透明 露胎：灰黄褐色 D 底部のみ完存	底部外面に目跡あり・貫入あり
33	青磁	椀	SK01	①（17.1）② 6.45 ④ 5.65	外面鎬蓮弁文、内面回転ナデ。削り出し高台。高台畳付部から底部外面までを除き施釉。	A 緻密。灰色 B 良好 C 釉：濃緑灰色透明 露胎：灰褐色 D1/4	見込みに花文印刻あり・高台に目跡あり
34	青磁	椀	SK01	①（12.8）②〈4.5〉	外面鎬蓮弁文、内面施釉により調整不明。内外面施釉。	A 緻密。灰色 B 良好 C 釉：青緑色 D 口縁部 1/3	貫入あり
35	青磁	椀	SK01	①（16.4）②〈3.65〉	外面蓮弁文、内面回転ナデ。内外面施釉。	A やや粗い。白色砂粒を含む、赤褐色 B 良好 C 釉：黄褐色 D 口縁部 1/3	貫入あり
36	青磁	椀	SK01	②〈2.2〉④ 6.45	削り出し高台。高台畳付部から底部外面までを除き施釉。	A 緻密。白色粒子を含む、灰色 B 良好 C 釉：明緑灰色 露胎：褐灰色 D 底部のみ完存	「金玉満堂」文字印刻
37	青磁	椀	SK01	②〈4.2〉	外面櫛目文、内面篦描文。内外面施釉。	A 緻密。白色粒子を若干含む、灰色 B 良好 C 釉：淡緑灰色透明 D 口縁部破片	貫入あり
38	青白磁	合子	SK01	②〈0.45〉	内外面施釉。施釉により調整不明。	A 精良。灰白色 B 良好 C 釉：明青灰色透明 D 天井部 1/3	印花文・貫入あり
39	中国産陶器	壺	SK01	①（11.9）②〈2.2〉	内外面回転ナデ、施釉。	A 精良。白色粒子を多く含む、茶褐色 B 良好 C 釉：灰褐色 D 口縁部 1/8	口縁部内面に目跡あり
40	中国産褐釉陶器	壺	SK01	①（10.0）②〈14.55〉胴部最大径（14.1）	外面胴部下位回転ヘラ削り、他は回転ナデ。内外面施釉。	A 白色砂粒を多く含む、暗褐色 B 良好 C 釉：茶褐～暗褐色 D 口縁部 1/8	

表3　川原遺跡第1次調査出土遺物観察表③

遺物番号	種　類	器　種	出土地点	法量（cm）①口径②器高③底径④高台径 ※（）は復元径〈〉は現存高	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調 D 残存	備　考
41	中国産陶器？	瓶？	SK01	②〈4.0〉③（10.6）	外面回転ナデ、内面断続的な横方向のナデ・回転ナデ。外面胴部下位まで施釉。	A0.5 ～ 2mm 程の白色砂粒をわずかに含み、黒色粒子をやや多く含む B 良好 C 釉：緑灰色～灰白色 露胎：外面：にぶい橙色～にぶい黄橙色 内面：にぶい橙色 D 底部 1/4	
42	滑石製品	石鍋	SK01	①（20.8）鍔径（24.0）②〈7.4〉	外面縦方向の鑿痕、内面斜め方向の鑿痕。	C 外面：黒色 内面：暗灰色～黒色 D1/3	外面煤付着
43	滑石製品	石鍋転用品	SK01	現存長 2.7　現存幅 4.8　器壁部最大厚 0.95　把手部最大厚 1.75	外面鑿痕、内面使用による擦過痕？把手部両側穿孔。端部内外面に転用時の調整痕あり。	C 暗灰色～褐灰色 D 破片	
44	滑石製品	石鍋転用品	SK01	現存長 5.7　現存幅 6.7　器壁部最大厚 1.7　鍔部最大厚 2.85	外面鑿痕、内面使用による擦過痕？側面と内面に転用時の調整痕あり。	C 外面：黒色 内面：暗灰色～灰色 D ほぼ完存	外面煤付着
45	土製品	土錘	SK01	全長 3.9　最大径 1.1 孔径 0.35 ～ 0.45	摩滅により調整不明。両側穿孔。	A 微細な白色砂粒と雲母細片をわずかに含む B 不良 C にぶい黄橙色～暗黄灰色 D ほぼ完存	
46	瓦	丸瓦	SK01	現存長 11.7　厚さ 2.4	凸面に斜格子叩き後すり消し、凹面に布目痕。	A0.5 ～ 4mm 程の白色砂粒を含む B 良好 C 灰白色 D 筒部破片	
47	鉄製品	鉄釘？	SK01	現存長 10.4　断面径 0.55 ～ 0.7	断面円形の鉄釘か？頭部と先端部を欠損する。	D 軸部のみ	
48	鉄製品	環状金具	SK01	外径 4.0 × 4.2 断面径 0.7 × 1.0	断面楕円形	D ほぼ完存	
49	石製品	砥石	SK01	現存長 5.3　現存幅 2.8　厚さ 2.3 ～ 2.8	砥面に使用による擦痕あり。側面敲打痕あり。	C 暗灰色～黄灰色	泥岩、砥面 2 面
50	石製品	砥石	SK01	現存長 6.4　現存幅 1.75　厚さ 0.8 ～ 1.03	砥面に使用による擦痕あり。	C 暗灰色	泥岩？砥面 3 面
51	須恵器	甕	SK01	②〈10.8〉　現存口縁部最大径（46.3）	外面回転ナデ後、2 段に沈線、間に波状文。内面自然釉により調整不明。	A0.5 ～ 1mm 程の白色砂粒と黒色粒子を少量含む B 良好 還元：良好 C 外面：灰色～黒褐色～灰オリーブ色 内面：灰色～暗黄褐色～灰オリーブ色 D 口縁部 1/8	※小破片のため径は不確定
52	須恵器	杯身	SK01	②〈0.85〉④（7.8）	内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラ切り・貼り付け高台、見込み不定方向のナデ。	A0.5mm 以下の白色砂粒をやや多く含み、1 ～ 2mm 程の白色砂粒をわずかに含む B 良好 還元：良好 C 外面：暗灰色 内面：灰色～暗灰色 D 底部 1/4	
53	須恵器	杯身	SK01	②〈3.1〉④（9.9）	内外面回転ナデ、見込み不定方向のナデ。貼り付け高台。	A 微細な白色砂粒と黒色粒子を少量含む B 良好 還元：不良 C 外面：灰白色～灰黄色 内面：灰白色 D 底部 1/4	
54	その他	椀形鍛冶滓	SK01	長さ 8.5　幅 8.2 最大厚 1.5		D ほぼ完存	写真のみ
55	その他	粘土塊	SK01	現存長 5.9　現存幅 3.7　現存厚 2.2		A 微細な白色砂粒と赤色粒子、スサを多量に含む C にぶい橙色～灰色	写真のみ
56	瓦器	椀	SP08	②〈3.1〉	外面摩滅により調整不明、内面ミガキ。	A 微細な白色砂粒と雲母細片を少量含む B やや不良 C 外面：灰白色（口縁部のみ黒色）内面：黒色 D 口縁部破片	
57	東播系須恵器	鉢	SP08	②〈5.1〉	内外面ナデ。	A0.5 ～ 1mm 程の白色砂粒を少量含む B 良好 還元：良好 C 外面：灰色～黄灰色～暗灰色 内面：灰色　D 口縁部破片	
58	瓦質土器？	不明	SP10	②〈2.25〉	外面摩滅により調整不明、底部外面ハケメ端部痕、内面横方向の粗いハケメ。	A0.5 ～ 1mm 程の白色砂粒をわずかに含み、赤色粒子を多く含む B やや不良 C 外面：黄橙色～橙色 内面：橙色 D 底部破片	
59	土師器	壺	SP43	①（8.5）② 8.55 胴部最大径（8.7）	外面摩滅により調整不明、底部外面指押さえ、内面削り状の強いナデ。	A0.5 ～ 2mm 程の白色砂粒をやや多く含み、赤色粒子と雲母細片を少量含む B 不良 C 外面：にぶい黄橙色～浅橙色～黄灰色 内面：にぶい黄橙色 D2/3	
60	東播系須恵器	鉢	SX01	①（23.3）②〈4.15〉	外面回転ナデ、内面ナデ。	A 微細な白色砂粒を少量含み、黒色粒子をわずかに含む B 良好 還元：良好 C 外面：灰色～黄灰色～暗灰色 内面：灰色～黄灰色 D 口縁部 1/6	
61	近世磁器	染付小杯	SX01	②〈2.6〉	内外面施釉。外面手描き染付。	A 精良。白色で緻密。若干黒色粒子を含む B 良好 C 釉：透明 D 口縁部破片	肥前 17c 後半？
62	近世陶器	椀	SX01	②〈3.15〉　④（4.0）	外面回転ヘラ削り、削り出し高台。高台畳付部を除き施釉（灰釉？）後、見込み蛇ノ目釉剥。	A にぶい赤褐色。白色細粒を少量含む B 良好 C 釉：黄褐色～暗褐色～灰白色 露胎：にぶい赤褐色 D 底部 1/3	唐津 18c

Ⅳ．まとめ

今回の調査では、１間×１間の掘立柱建物（ＳＢ 01）１棟、井戸の可能性がある大型土坑（ＳＫ 01）１基、多数のピット、窪み状遺構（ＳＸ 01）を確認した。ＳＫ 01 以外の遺構では出土遺物は少ないが、遺構の時期について簡単にまとめてみたい。

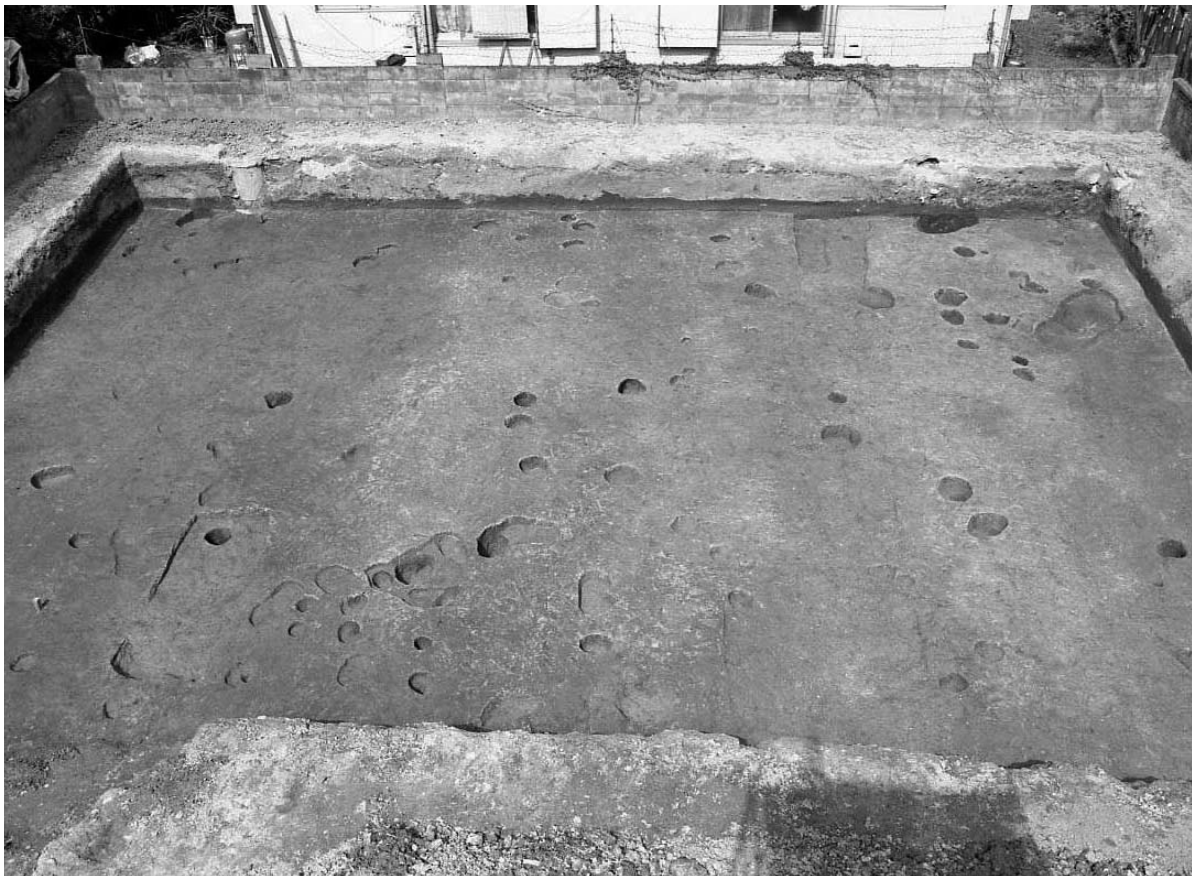
最も出土遺物の多いＳＫ 01 は、時期の特定できる陶磁器に着目すると、白磁椀Ⅳ類・Ⅸ類、皿Ⅲ類・Ⅸ類、龍泉窯系青磁椀Ⅰ類～Ⅲ類、皿Ⅰ類、同安窯系青磁椀が出土しており、11 世紀後半～ 14 世紀前半の時期幅を有している。遺構の埋没年代としては、最も新相の白磁椀Ⅸ類・皿Ⅸ類から判断して、13 世紀後半～ 14 世紀前半と考えることが妥当であろう。さらに、瓦器椀、東播系須恵器鉢、滑石製石鍋、常滑甕など、その他の出土遺物をみても、主体となる時期は 12 ～ 13 世紀で、陶磁器の年代観に矛盾しない。その他、古代の須恵器杯身などが出土するが、これらは混入品と思われ、以下に述べるＳＰ 43 も含めて古墳時代や古代の遺物は、付近に存在する仲島遺跡や井相田遺跡群との関連が想定される。

掘立柱建物とピット群の大部分は、出土遺物が小破片のみであり、時期不明とするほかない。時期がある程度わかる遺構としては、ＳＰ 08 とＳＰ 43 が挙げられる。ＳＰ 08 は口縁部が直線的で口縁端部が上下に拡張する東播系須恵器鉢と瓦器椀が出土することから、おおよそ 12 ～ 13 世紀、ＳＰ 43 は古墳時代中期の小形の壺が出土するため当該時期の遺構になると考えられる。

窪み状の遺構であるＳＸ 01 の出土遺物は、弥生土器から須恵器、白磁、青磁、近世陶磁器など各時代様々であるが、最も新しい明治以降と思われる陶磁器や石炭片より、近代に埋没した落ち込みと思われる。

このように、小規模な調査のため遺跡の全体像を把握することは困難だが、中世を主体とする集落の一部が確認されたといえる。今後、川原遺跡周辺の調査によって、市内の中世遺跡のさらなる解明が期待される。

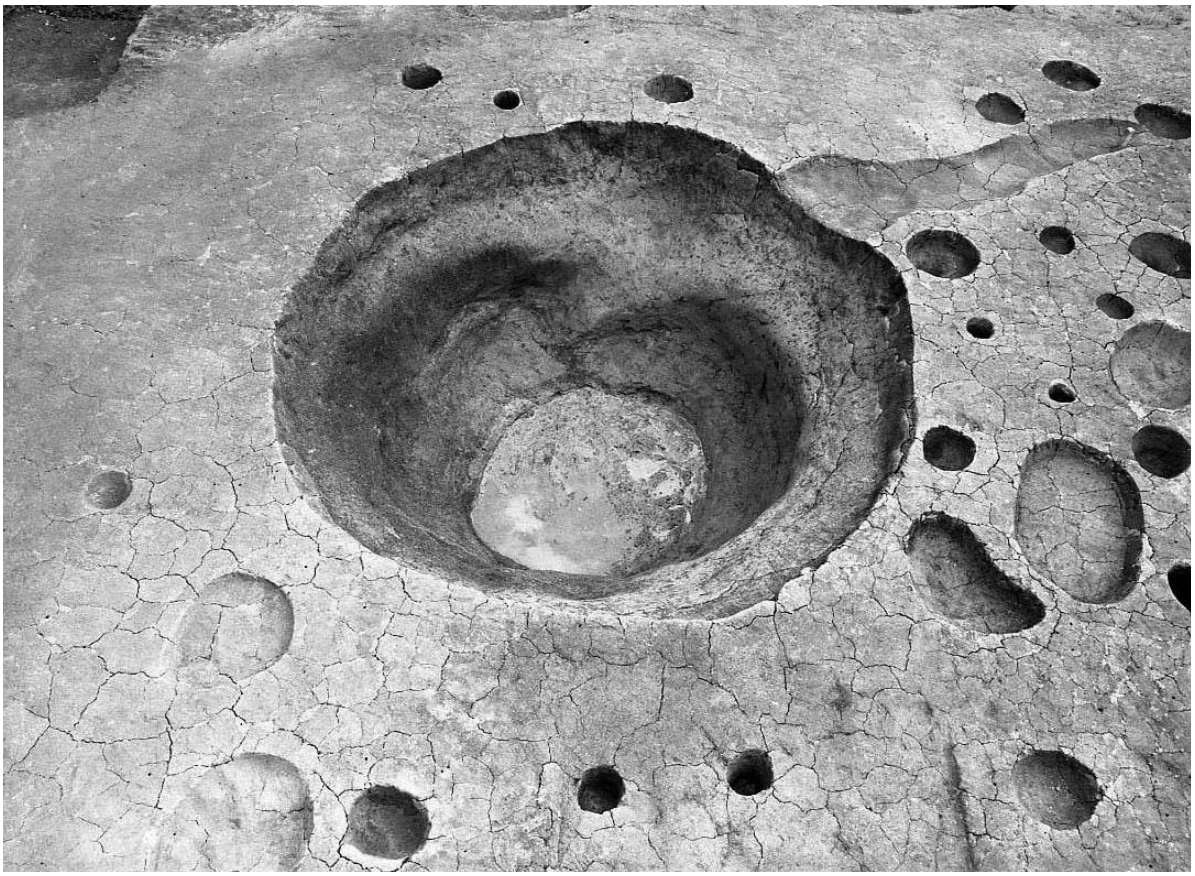
図　　版



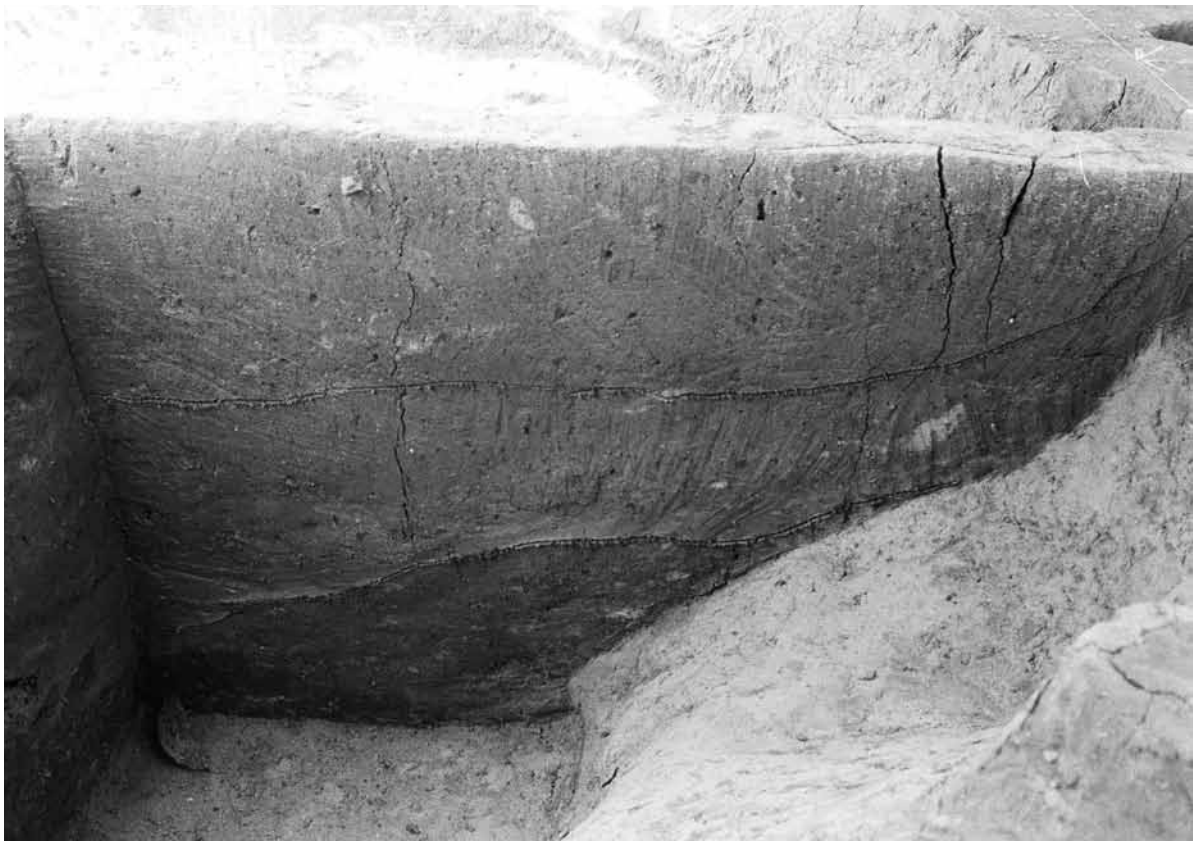
(1)　調査区東半（南西から）

(2)　調査区西半（北東から）

図版 2



(1)　ＳＫ 01（北東から）



(2)　ＳＫ 01 土層断面（北から）

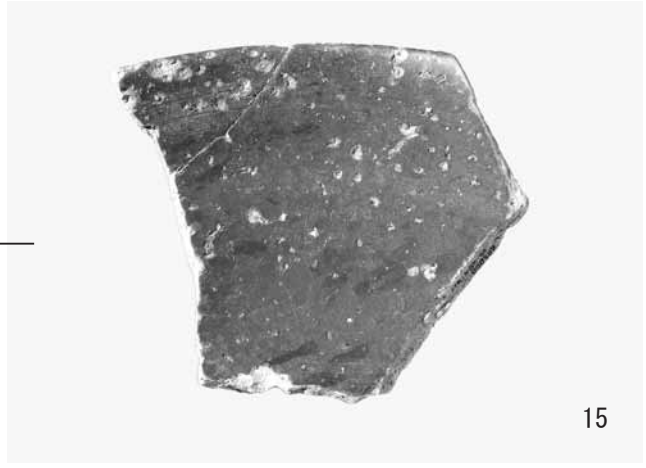
1

2

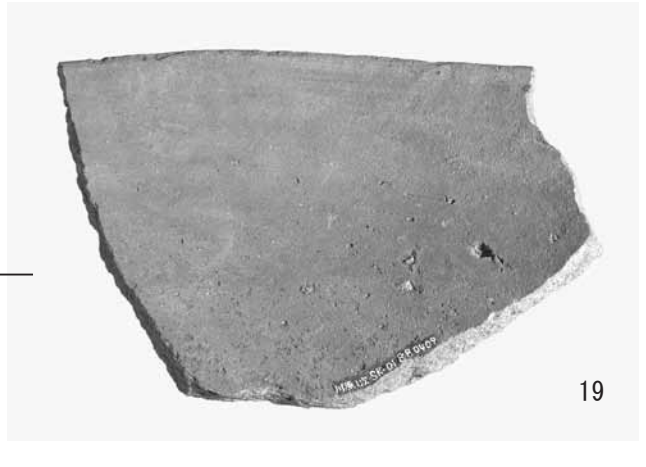
6

14

12



15



19

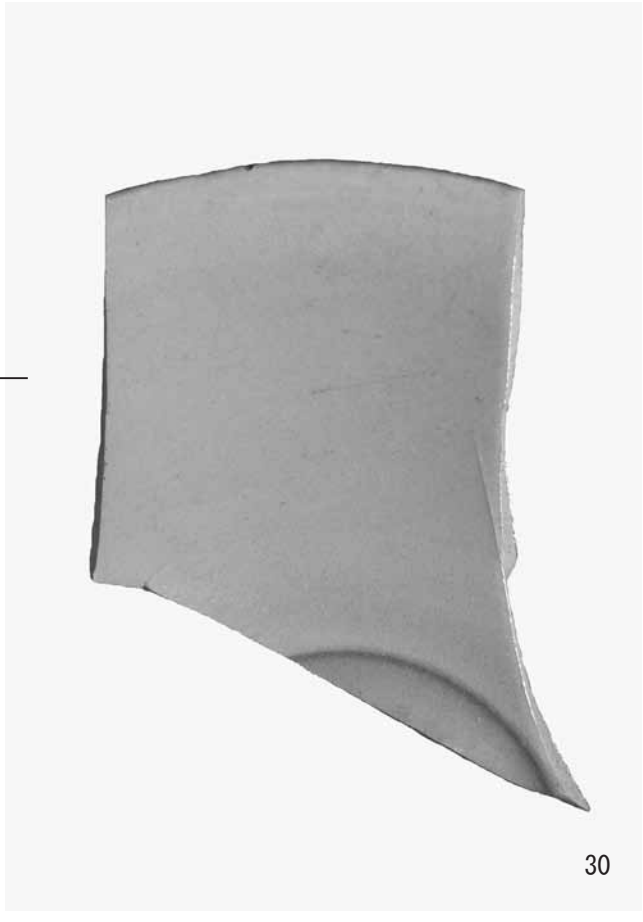
出土遺物①（ＳＫ 01）

図版 4

22

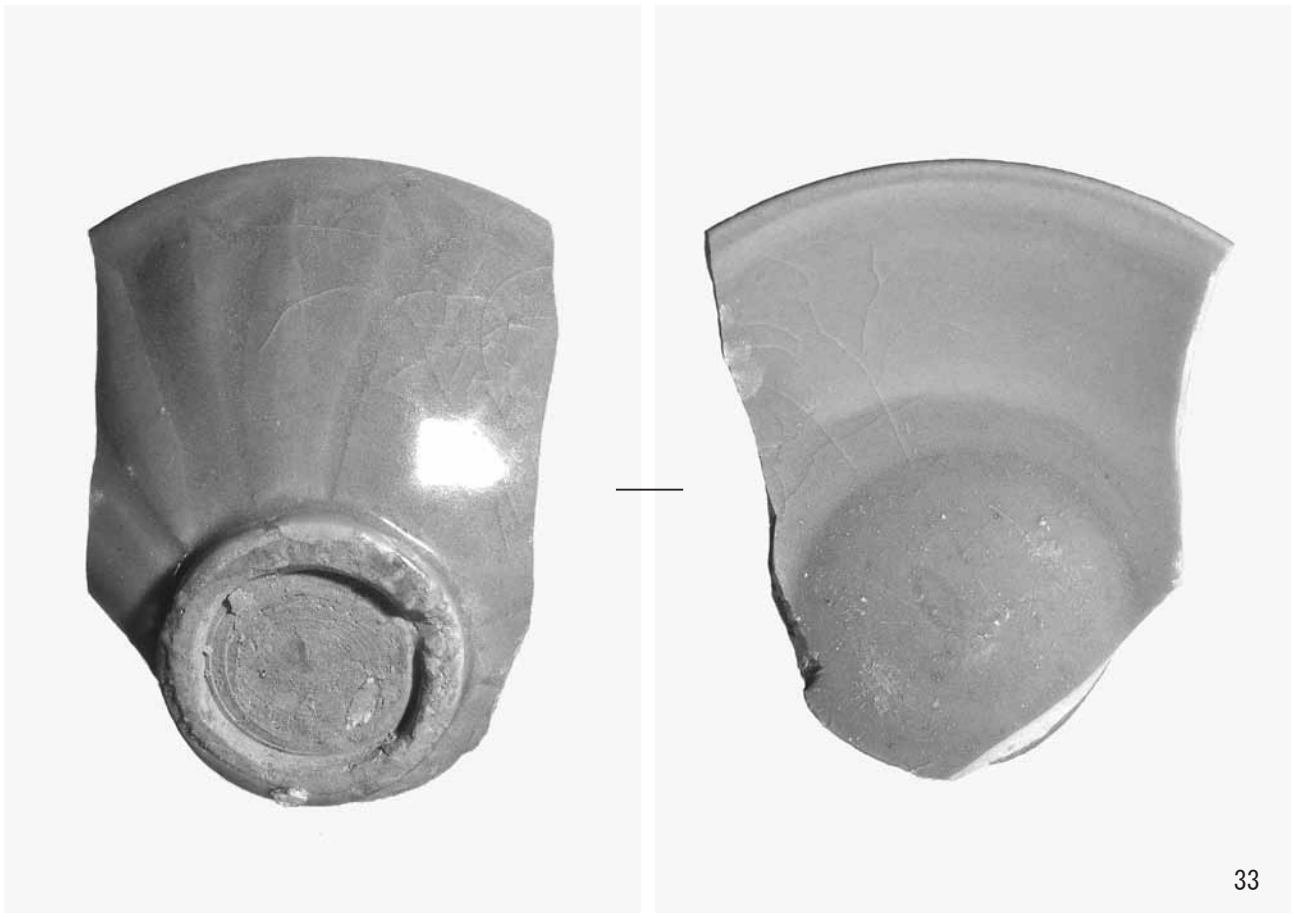
28

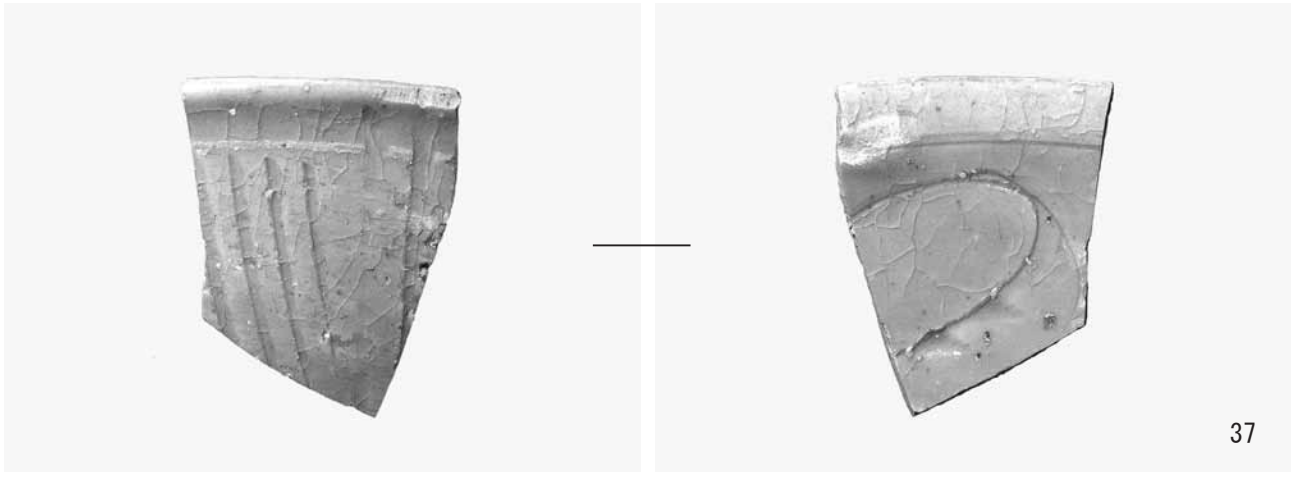
29



30

出土遺物②（ＳＫ 01）





出土遺物③（ＳＫ 01）

図版 6

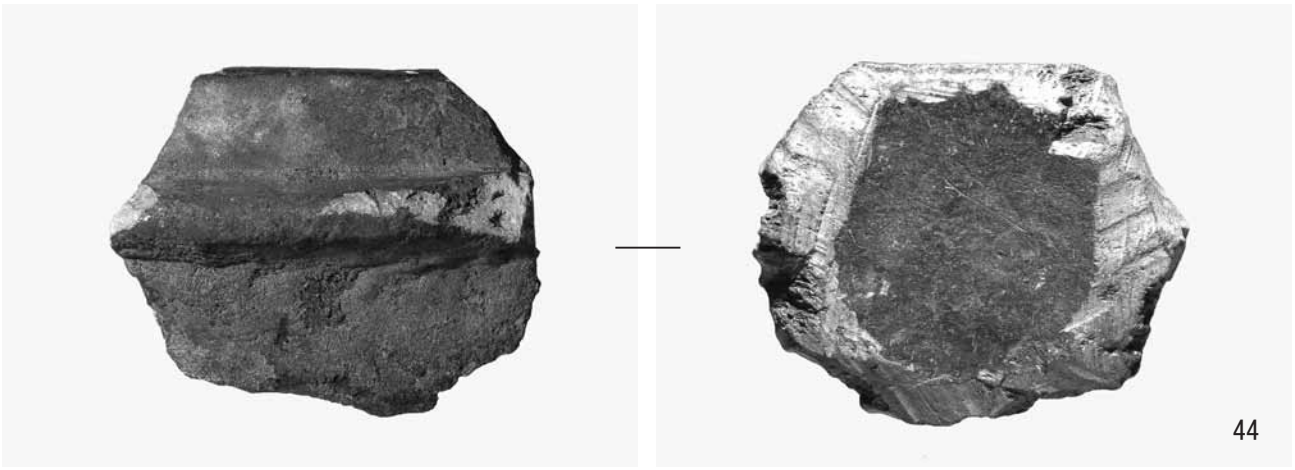
38

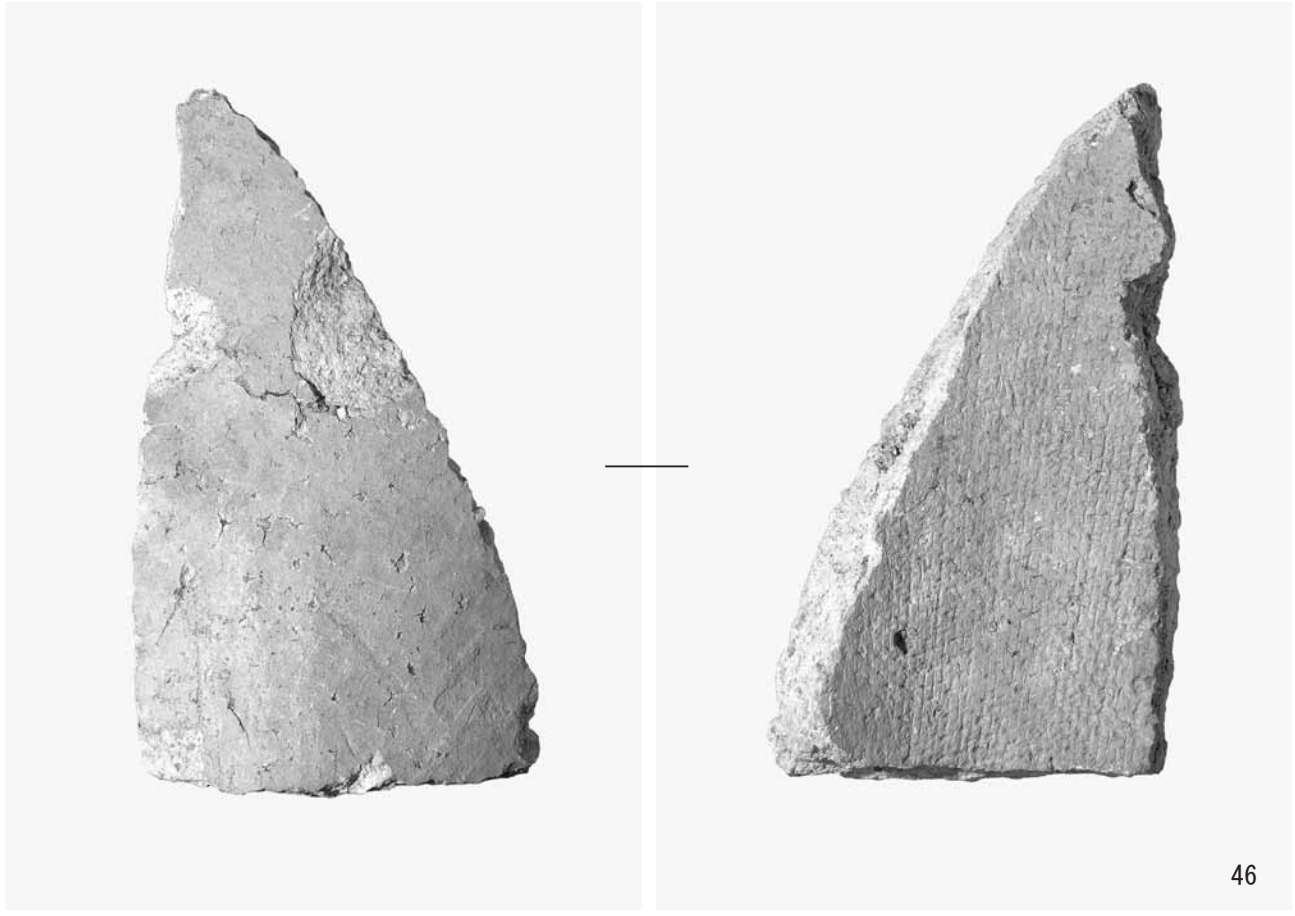
42

40

43

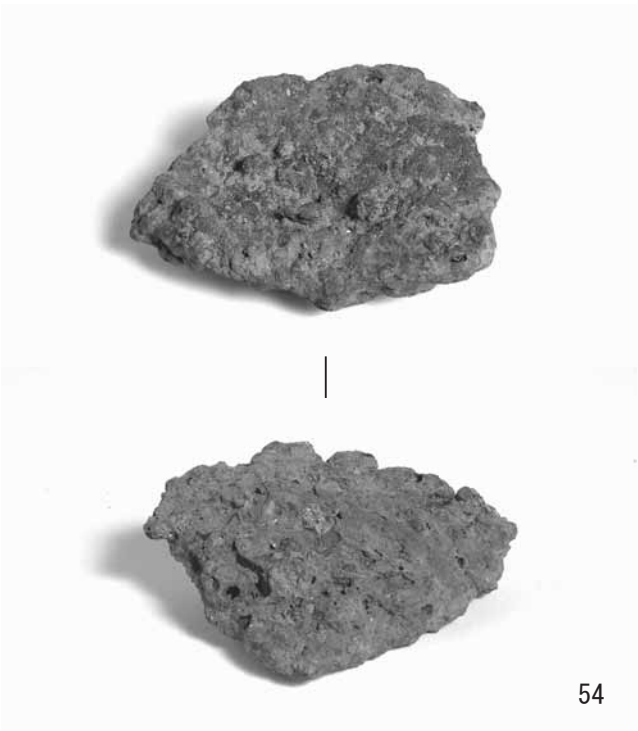
出土遺物④（ＳＫ 01）



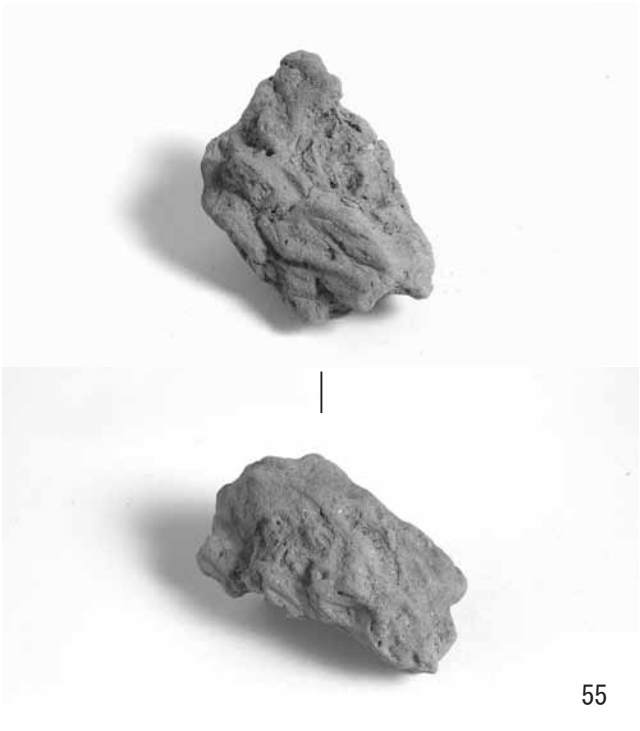


出土遺物⑤（ＳＫ 01）

図版 8



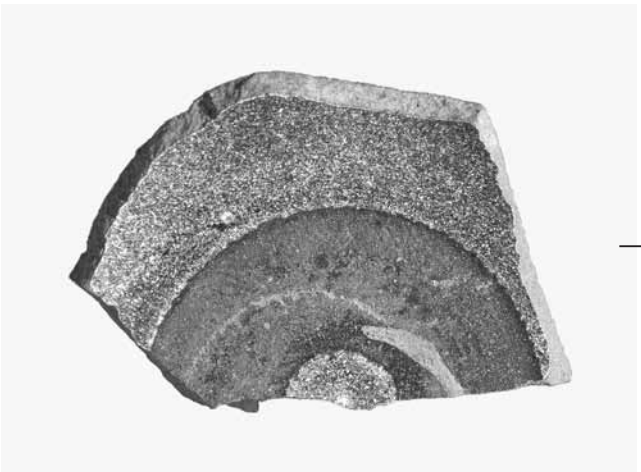
54



55

58

59



62

出土遺物⑥（54・55：ＳＫ 01、58：ＳＰ 10、59：ＳＰ 43、62：ＳＸ 01）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かわはらいせき
書　　名	川原遺跡 I
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 78 集
編 著 者 名	舟山　良一，林　潤也，伊藤敬太郎，岡　めぐみ
編 集 機 関	大野城市教育委員会
所 在 地	〒 816-8510　福岡県大野城市曙町 2 － 2 － 1　TEL092-501-2211
発行年月日	西暦 2008 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かわ はら 川原遺跡	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 なかはた 仲畑			33° 33′ 5″	130° 28′ 19″	1988.4.4 ～ 1988.4.26	約 280m^2	共同住宅建設

所収遺跡名	種名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川原遺跡	集落	中世	土坑 掘立柱建物	土師器 須恵器 瓦器 陶磁器 石鍋 瓦	中世前期の 土坑を検出

要約

川原遺跡第1次調査では、1間×1間の掘立柱建物1棟、大型土坑1基、多数のピット、窪み状遺構を検出した。井戸の可能性がある大型土坑からは、瓦器椀、白磁椀・皿、龍泉窯系・同安窯系青磁椀、東播系須恵器鉢、滑石製石鍋、曲物の底板などが出土しており、本調査の遺物の大半を占める。出土陶磁器の年代は 11 世紀後半～ 14 世紀前半で、遺構の埋没年代は 13 世紀後半～ 14 世紀前半と考えられる。掘立柱建物やピットの大部分は、出土遺物が小破片のため、時期は不明である。4つの窪み状からなる不整形遺構は、弥生時代から近代までの遺物が出土し、明治以降に埋没したものと思われる。小規模な調査のため、遺跡の全体像を把握することは困難であるが、中世を主体とする集落の一部が確認されたといえる。

大野城市文化財調査報告書

第 78 集

平成 20 年 3 月 31 日

発行　大野城市教育委員会

福岡県大野城市曙町 2－2－1

印刷　(株)川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭 6－6－41